日本語の文法単位について

菅野裕臣

普通言語では形態素，単語，文等の単位が抽出されるとされている．しかしその基準は極めてあいまいである．

そこでまず日本語について，いろいろの要素を出来るだけ客観的に取り出し得る基準というものを確立したいと思う．

基準は多くの人々に共通した言語感覚に依拠すべきであるが，この感覚はしばしば揺れており，われわれはそのことも正直に記述する必要がある．

(1) 文節と呼気段落

日本語で言葉の流れの中で真っ先に取り出されるのはいわゆる「呼気段落」であろう．「呼気段落」もさまざまな大きさのものがあり得る．

例えば，次の新聞記事の一節がある．

「第2次世界大戦後に旧ソ連が現在の北朝鮮東部に開いた「第53送還収容所」で死亡した日本人抑留者869人のうち，98人は当初の開設地の興南（現在の北朝鮮・咸興（ハムフン）市興南（フンナム）地区）ではなく，移送先のソ連領内・ナホトカでなくなっていたことが分かった．」（『読売新聞』2015年4月3日号朝刊）

この文は読む際に以下のように / のところで一応の区切りが置かれることがある．ここではたまたまその位置に読点が置かれているが，読点の位置については日本語に何の規定もないから，それが義務的かどうかは不分明である[1]．

「第2次世界大戦後に旧ソ連が現在の北朝鮮東部に開いた「第53送還収容所」で死亡した日本人抑留者869人のうち，/98人は当初の開設地の興南（現在の北朝鮮・咸興（ハムフン）市興南（フンナム）地区）ではなく，/ 移送先のソ連領内・ナホトカでなくなっていたことが分かった．」

この文は読む際にさらに次のように / の位置に区切りを置くことが可能である．

「第2次世界大戦後に / 旧ソ連が / 現在の北朝鮮東部に開いた /「第53送還収容所」で死亡した / 日本人抑留者869人のうち，/98人は / 当初の開設地の興南 /（現在の北朝鮮・/ 咸興（ハムフン）市興南（フンナム）地区）ではなく，/ 移送先のソ連領内・ ナホトカで / なくなっていたことが分かった．」

さらにこの文は次のように区切ることが可能である．

「第 2 次世界大戦後に / 旧ソ連が / 現在の / 北朝鮮東部に / 開いた /「第53送還収容所」で / 死亡した / 日本人抑留者 /869人のうち，/98人は / 当初

の / 開設地の / 興南 / (現在の / 北朝鮮・/ 咸興（ハムフン）市 / 興南（フンナム）地区）ではなく, / 移送先の / ソ連領内・ / ナホトカで / なくなっていたことが / 分かった.」

上の文で下線の部分はさらに区切ることが可能である.「869 人の / うち」,「興南（フンナム）地区）では / なく」,「なくなって / いた / ことが」.

以下のような区切りと区切りの間の単位が普通国文法で言うところの「文節」に当たる. 一見これが最終的な「文節」の単位による区切りのように見える.

「第 2 次世界大戦後に / 旧ソ連が / 現在の / 北朝鮮東部に / 開いた /「第 53 送還収容所」で / 死亡した / 日本人 / 抑留者 /869 人(八百 / 六十 / 九人) の / うち, /98 人 (九十 / 八人) は / 当初の / 開設地の / 興南 / (現在の / 北朝鮮・/ 咸興（ハムフン）市 / 興南（フンナム）地区）では / なく, / 移送先の / ソ連領内・ / ナホトカで / なくなって / いた / ことが / 分かった.」

しかしさらに下線部の内部も区切ることが可能のようである.「第 2 次 / 世界大戦後」(さらに「世界大戦」も「世界 / 大戦」のように区切ることも可能),「北朝鮮 / 東部」「第 53（第五十 / 三）送還 / 収容所」,「日本人 / 抑留者」,「869 人（八百 / 六十 / 九人)」,「98 人（九十 / 八人)」.

こうして最終的には次の最小の区切りが得られる. // はいわゆる「**文節**」の境界である. / も // も一応「**呼気段落**」と言ってよいと思う. これは日本語の多くの方言でアクセントの観点からも一つのまとまりを成す.「呼気段落」は日本語では音声的な第一次的な単位[2]であるだけでなく, 文法的な諸単位を取り出す際の第一次的なものと言ってよい.

「第 2 次 / 世界 / 大戦後に // 旧ソ連が // 現在の // 北朝鮮 / 東部に // 開いた //「第 53（第五十 / 三） / 送還 / 収容所」で // 死亡した // 日本人 / 抑留者 //869 人（八百 / 六十 / 九人）の // うち, //98 人（九十 / 八人）は // 当初の // 開設地の // 興南 //（現在の // 北朝鮮・// 咸興（ハムフン）市 // 興南（フンナム）地区）では // なく, // 移送先の // ソ連領内・ // ナホトカで // なくなって // いた // ことが // 分かった.」

さらにアクセントの観点からは, 上記の文で文節ごとにアクセントによって統合されることがあり, またさらに大きな単位 (____) がそのような統合体をなすことがあるだけでなく,「北朝鮮 / 東部に // 開いた」,「「第 53（第五十 / 三） / 送還 / 収容所」で // 死亡した」,「当初の // 開設地の」,「移送先の // ソ連領内・ // ナホトカで」のようなものもアクセントによって統合され得るなど, はなはだ多様である. アクセントによる統合は個人差が大いにあり得ることを示している. いずれにせよ, これらもまた日本語のある種の文法的関係の反映でないものはない. すなわち前者 (____) は多く「分析的な形」に関連し, 後者は「状況語＋述語」,「修飾語＋被修飾語」などの統辞論的関係に関連する.

ところで上記の文でアクセントの観点からは「/ 第2次 / 世界 / 大戦後に //」も「/ 第53（第 五十 / 三）/」も各々下線のように2つの単位に分かれるのが普通であるから，ここで名づけた「呼気段落」が必ずしもアクセントによって統合されていないこともあり得ることに言及しておこう．

呼気段落は日本語だけの単位ではなく，多くの言語に認められるだけでなく，それと文法との関連が興味深い[3]．日本語のような膠着語は呼気段落その他の文法単位も他の膠着語と類似の現象を示す．

以下に主として呼気段落とアクセントの観点から日本語の文法単位を考察する．その資料として，筆者は不充分ながらも「日本語造語要素」なる一篇を『韓国語学年報』第10号（2014年4月）に掲載したが，本稿はそれとの関連において述べることとする．

(2)「文節」の境界のあいまいなもの，自立語と付属語

「文節」の境界が明瞭かといえば，必ずしもそうではない．「ナホトカで // なくなって // いたそうだ //」，「ナホトカで // なくなって // いたようだ //」，「ナホトカで // なくなって // いたらしい //」の下線部はいわゆる国文法で「助動詞」と呼ばれるものだが，この場合「いた」と「そうだ」，「ようだ」，「らしい」との間に区切りを置く個人もあり得ると思う．

ここで共通しているのは下線部の前で一応の切れ目が可能だということである（この切れ目を記号・で示す．なお日本語をローマ字で表記する時には，・の部分が分かち書きの境界となると考えてよい）．それは「名詞＋助詞」（「本・は」，「本・を」，「本・の」等々）の「**助詞**」と同じく「名詞」から一応切り離され得るという点で「助動詞」と似ている（両者は「文節」を成す点で共通している）．さらに「助詞」と「助動詞」を除いた部分だけで文節をなし得るという点でも共通している．ただこの場合の「助動詞」は「助詞」よりも若干独立性が強いと言えようか？　このようなそれ単独で自立し得る部分を「自立語」，単独で一応独立させ得るが，自立性に欠ける部分（助詞と助動詞）を「付属語」と呼ぶこととする．日本語では「付属語」は変化しない「助詞」と変化する「助動詞」の2種類を認め得る．非過去形：「いた・らしい」－ 過去形：「いた・らしかった」参照．

次の文を比較されたい．

「これ・は / わたくし・の / 本・だ.」－「これ・は / わたくし・の / 本・だった.」

「これ・は / わたくし・の / 本・です.」－「これ・は / わたくし・の / 本・でした.」

「これ・は / わたくし・の / 本・らしい.」－「これ・は / わたくし・の / 本・

らしかった.」
「これ・は / わたくし・の / 本らしい・です.」ー「これ・は / わたくし・の / 本・らしかった・です.」
「これ・は / わたくし・の / 本・みたい (だ).」ー「これ・は / わたくし・の / 本・みたい・だった.」
「これ・は / わたくし・の / 本・みたい・です.」ー「これ・は / わたくし・の / 本・みたい・でした.」

ここで「だ」,「です」,「らしい」,「みたい」は変化するので,「助動詞」であると言える.

ところで次の場合 a と b で違いがあるとして下線部は普通 a は「助動詞」, b は「**接尾辞**」と区別している (変化形は両者同じである). つまり b では「名詞＋接尾辞」で 1 単語をなし,「学生らしい」は「形容詞」,「学生みたい (だ)」は国文法式には「形容動詞」ということになる. しかしながら, ここでも b の場合にも, a の場合と同じく,「学生」と後続の「らしい」,「みたい (だ)」との間には区切りを入れ得る個人もあり得ると思う.

a.「彼・は / この / 大学・の / 学生・らしい.」,「彼・は / この / 大学・の / 学生・みたい・(だ).」
b.「彼・は / いかにも / 学生らしい (or 学生・らしい).」,「彼・は / いかにも / 学生みたい・(だ) (or 学生・みたい・(だ)).」

ちなみに「学生らしく」は b の場合は「副詞形」, a の場合は「学生らしい and」の意味であろう. つまり助動詞の「らしい」には副詞形がないであろう.

次の文を比較されたい.
「この / 部屋・は / 静か・だ.」ー「この / 部屋・は / 静か・だった.」
「この / 部屋・は / 静か・です.」ー「この / 部屋・は / 静か・でした.」
「この / 部屋・は / 静か・らしい.」ー「この / 部屋・は / 静か・らしかった.」
「この / 部屋・は / 静か・らしい・です.」ー「この / 部屋・は / 静か・らしかった・です.」
「この / 部屋・は / 静か・みたい・(だ).」ー「この / 部屋・は / 静か・みたい・だった.」
「この / 部屋・は / 静か・みたい・です.」ー「この / 部屋・は / 静か・みたい・でした.」

これらと「これ・は / わたくし・ の / 本・だ.」とは形式上はまったく同じである.

違いはこれらには「静か・な / 部屋」のような「連体形」と「静か・に / 暮らす」のような「副詞形」が存在することである.「本・に」と「静か・に」とでは同じ「に」でもまったく機能が異なる. しかし例えば「本・な・のに」と「静

か・な・のに」とでは下線部の機能は同じと思われるが，国文法では「静かだ」を全体として「形容動詞」と名付け，「静か」はその「語幹」であるとする．しかも辞書には，いわゆる形容動詞の場合，語幹を見出し語として立てることにしている．

しかし日本人の普通の言語感覚では「本だ」も「静かだ」も同じく「本・だ」，「静か・だ」のように切れるということは，よほど文法を叩き込まれない限り，一般庶民に両者の区別がつかないことを見ても理解し得る．形態的な特徴から出発すべき文法論に意味を真っ先に持ち込んだ弊害がここに見える．

わたくしは形容動詞を立てず，その語幹なるものを名詞の一種と見，それを「**形容名詞**」[4]と呼び，普通の名詞から区別する．普通の名詞は格助詞と助動詞を取り得るが，形容名詞は格助詞を取り得ず，助動詞だけを取り得る（なお普通の名詞も形容名詞も助動詞の省略形，すなわち語根だけの形を持つ．また形容名詞だけが助動詞の副詞形[5]を持ち得る）．

つまり動詞がみな「動作」を表すわけではなく，それとは統辞論的に異なることにより「状態」あるいは「性質」を表すものがあり得るように（動作動詞「書く」の現在形「書いて / いる」，しかし状態動詞「ある」－「ある」，「できる」－「できる」[「できて / いる」は「制作完了」を意味する]，「異なる」－「異なる」あるいは「異なって / いる」等々），名詞も「性質」を表すものがあり得るのである（これらは格助詞を取らない）[6]．

そうであるならば a の場合の「本・みたい」，「静か・みたい」の「みたい」は形容名詞型の付属語ということになる．じつは上述の「いた・そう・だ」，「いた・よう・だ」について見れば，これら「そう」，「よう」も**形容名詞型の付属語**であると言える（これらは形容詞のように「だ」を省略し得る）．

ここで整理すると，日本語の『助動詞』には次のものがあることになる．

a) 「・だ」（名詞＋，形容名詞＋，形容詞と動詞のある種の形＋，助動詞 d)＋），
b) 「・です」（名詞＋，形容名詞＋，形容詞と動詞のある種の形＋，助動詞 c），d)＋），
c) （形容詞型）「・らしい」[7]（名詞＋，形容名詞＋，形容詞＋，動詞），
d) （形容名詞型）「・よう」（名詞＋の＋，形容名詞＋な＋，形容詞＋，動詞＋），
「・そう」（名詞＋だ＋，形容名詞＋だ＋，形容詞＋，動詞＋），
「・みたい」（名詞＋，形容名詞＋，形容詞＋，動詞＋）．

「・だ」，「・です」，「・らしい」は「助動詞」よりも「**繋辞**」と呼んだ方がよいと思われる．d) は付属語的な形容名詞と呼ぶべきである．

これに隣接するものに次のものがある（すべて名詞＋，形容名詞＋，形容詞＋，動詞＋）．α) 「・の」，β) 「/ こと」，γ) 「/ もの」，δ) 「/ はず」，ε) 「/ わけ」，ζ)「・だけ」等々．これらのうち α)，ζ) は「助詞」と呼ぶことにするが，その他

は自立性の弱い名詞，すなわち不完全名詞[8]に準ずる名詞というべきであろう．

さらに上述の文のうち「死亡・した」だけでなく，「御返事・申し上げる」，「御返事・いたす」，「お電話・くださる」，「お電話・なさる」などの「名詞＋動詞」からなる合成動詞と呼ばれるものも（「造語要素」(b) 接頭辞及び接尾辞的要素（＋名詞＋動詞）参照），名詞と動詞の間に区切りを入れる個人があり得ると思う．つまりアプリオリに「文節」の単位を設定するわけにもいかないのである．これらを合成動詞と見るならば，「接頭辞＋名詞＋動詞」のうちの「動詞」は接尾辞と呼ぶしかないが，これらが名詞の後に助詞を取り得ることを考慮するならば，それはもはや自立語であると言わざるを得ない．このようなものをわたくしは「**分離動詞**」[9]ととりあえず名付けようと思う．

「死亡・した」－「死亡・は / した」，「死亡・まで / した」
「読書・できる」－「読書・が / できる」，「読書・は / できる」
「御返事・申し上げる」－「御返事・を / 申し上げる」，
「御返事・いたす」－「御返事・を / いたす」，「御返事・まで / いたす」
「御返事・できる」－「御返事・が / できる」，「御返事・も / できる」
「お電話・くださる」－「お電話・を / くださる」，「お電話・も / くださる」
「お電話・なさる」－「お電話・を / なさる」，「お電話・さえ / なさる」
「お電話・できる」－「お電話・が / できる」，「お電話・は / できる」
「御返事・ねがう」－「御返事・を / ねがう」，「御返事・は / ねがう」

1字の漢字からなるものは分離動詞はあり得ない．例：「対-する」，「関-する」，「応-ずる」～「応-じる」，「準-ずる」「準-じる」．また「書き-書き・する」も分離動詞ではないかと思われる．「書き-書き・は / する」．分離動詞としてはほかに「・あそばす」，「・いただく」，「・ねがう」，「もうしあげる」，「もうす」などがある．

なお「**分離形容詞**」とでも呼ぶべきものがある．

「気持ち・よ-い」－「気持ち・が / よ-い」，「気持ち・は / よ-い」
「気持ち・わる-い」－「気持ち・が / わる-い」，「気持ち・は / わる-い」
「興味・ある」－「興味・が / ある」，「興味・は / ある」
「興味・ない」－「興味・が / ない」，「興味・は / ない」

(3) 語尾と接尾辞

自立語と付属語のうち変化するものは付属語では繋辞「・だ」，「・です」，「・らしい」だけで，自立語のうちでは「動詞」と「形容詞」だけである．これらの変化詞は次のように変化する形（変化形）を持つ．

「よい」，「よく」，「よかっ-た」，「よかっ-たら」，「よけれ-ば」，「よかろう」．
「書く」，「書か-ない」，「書か-なかっ-た」，「書か-なかっ-たら」，「書か-なけれ

-ば」,「書か-ず（-に）」,「書い-た」,「書い-たら」,「書い-て」,「書き」,「書き-ながら」,「書け-ば」,「書け」,「書こう」.

「本・だ」,「本・だっ-た」,「本・だっ-たら」,「本・で」,「本・なら（-ば）」,「本・だろう」,「本・なら（-ば）」,「本・な」.

「本・です」,「本・でし-た」,「本・でし-たら」,「本・でしょう」.

「本・らしい」,「本・らしく」,「本・らしかっ-た」,「本・らしかっ-たら」.

さらに上の形の中で「-た」,「-たら」は「過去」,「-ない」,「-なかっ-」,「-なけれ-」,「-ず（-に）」は「否定」を表す部分であること,「-ば」は「仮定」,「-て」は「中止」,「-ながら」は「同時」を表す部分に該当することが分かる．ここで「-」は意味上の単位の境界ではあるが,「・」とは異なり，音声上の相対的な切れ目をなすことがないことを示す．さらに「-ば」（仮定）,「-て」（中止）,「-ながら」（同時）は変化せず,「-た」,「-たら」（過去）,「-ない」,「-なかっ-」,「-なけれ-」,「-ず（-に）」（否定）はそれぞれ語形が変化するものと見ることが出来る．このように自立性がまったくない形態素（これは相対的な自立性を持つ付属語とも異なる）のうち，変化しないもの（前者）を「**語尾**」，変化するもの（後者）を「**接尾辞**」と呼ぶことにしよう．

これを整理する．

単語（自立語は記号を取らず，付属語は記号「・」を取る）

不変化詞	自立語	名詞その他
	付属語	助詞，付属語的形容名詞
変化詞	自立語	形容詞，動詞
	付属語	繋辞（・だ,・です,・らしい），付属語的動詞（分離動詞）

単語の中の文法的要素（すべて記号「-」を取る）

変化しないもの	語尾（「-ば」,「-て」,「-ながら」）
変化するもの	接尾辞（「-た」,「-ない」）

以上述べたことをもとに日本語の変化詞と変化する接尾辞の表を以下に示す．

日本語変化詞及び接尾辞変化表

備考

1 ― 接尾辞「-せる」,「-れる」（子音語幹動詞と不規則動詞「する」＋）,「-させる」,「-られる」（母音語幹動詞と不規則動詞「来る」＋）に接続する．

2 ― 接尾辞「-ない」,「-ます」，語尾「-ず（-に）」＊（動詞だけ）,「-ん」（接尾辞「-ます」だけ）に接続する．「-まい」は母音語幹動詞と不規則動詞に接尾する．

中止 ― それだけで「文の中断」を表す．また強調形「中止・は / する」,

「中止・も / する」(動詞の場合),「中止・は / ある」,「中止・も / ある」(形容詞) 等,「中止 / 中止 / する」(動詞のみ) のように用いられる. また形容詞と形容詞型繋辞では語尾「-て」及び動詞「する」と「なる」に接続する.

3 ― 接尾辞,「-ます」,「-たい」,「-たがる」(動詞+),「-た」(形容詞+, 形容詞型繋辞+) 語尾「-ながら」(動詞+) に接続する. 動詞の場合, 名詞, 形容詞, 動詞に接続して合成語を作る (「作り方」,「作りやすい」,「作り続ける」等々).

音便 (子音語幹動詞だけ) ― 接尾辞「-た」～「-だ」,「-たり」～「-だり」, 語尾「-て」～「-で」(動詞だけ) に接続する (それぞれ後者は m 語幹, n 語幹, b 語幹にのみ接尾, それ以外には前者が接尾する).

終止 ― それだけで文末に, あるいは語尾「・と」,「・けれど (も)」,「・から」,「・し」(接続助詞) 及び「・か」,「・よ」,「・さ」,「・ね」,「・わ」等あるいはそれらの合成形 (「・よね」,「・かね」等々) (終助詞), また引用助詞「・って」に接続する.「・まい」は子音語幹動詞の終止形に接尾ずる.

連体 ― 修飾語として用いられる. また語尾「・のに」,「・ので」にも接続する.

仮定 ― 語尾「-ば」に接続する.

命令 (動詞だけ) ― それだけで文末に, あるいは語尾「・よ」,「・よね」等々及び引用助詞「・って」に接続する.

勧誘 (動詞だけ) [10]― それだけで文末に, あるいは語尾「・よ」,「・よね」等々及び引用助詞「・って」に接続する.

推量 (形容詞, 繋辞だけ) [10]― それだけで文末に, あるいは語尾「・よ」,「・よね」等々及び引用助詞「・って」に接続する.

[4] ― m 語幹, n 語幹, b 語幹動詞に付くときは「-た」は「-だ」となる.

[5] ― 「-せる」(子音語幹動詞と不規則動詞「する」+),「-させる」(母音語幹動詞と不規則動詞「来る」+)

[6] ― 「-れる」(子音語幹動詞と不規則動詞「する」+),「-らせる」(母音語幹動詞と不規則動詞「来る」+)

* ― 語尾「-ば」が省略されることが多い.

語基	語幹	子音語幹動詞						
		s 語幹	k 語幹	g 語幹	t 語幹	Ø 語幹	r 語幹	m 語幹
I	1	出さ-	書か-	嗅が-	立た-	買わ-	知ら-	読ま-
	2							

II	中止	出し	書き	嗅ぎ	立ち	買い	知り	読み
	3	出し-	書き-	嗅ぎ-	立ち-	買い-	知り-	読み-
	音便		書い-	嗅い-	立っ	買っ-	知っ-	読ん-
III	終止	出す	書く	嗅ぐ	立つ	買う	知る	読む
	連体							
IV	仮定	出せ-	書け-	嗅げ-	立て-	買え-	知れ-	読め-
V	命令	出せ	書け	嗅げ	立て	買え	知れ	読め
VI	勧誘	出そう	書こう	嗅ごう	立とう	買おう	知ろう	読もう

語基	語幹	子音語幹動詞[11]		母音語幹動詞		不規則動詞	
		n 語幹	b 語幹	i 語幹	e 語幹	来る	する
I	1	死な-	飛ば-	起き-	出-	来（こ）-	さ-
	2						し-,*せ-
II	中止	死に	飛び	起き	出	来（き）	し
	3	死に-	飛び-	起き-	出-	来（き）-	し-
	音便	死ん	飛ん-				
III	終止	死ぬ	飛ぶ	起きる	出る	来（く）る	する
	連体						
IV	仮定	死ね-	飛べ-	起きれ-	出れ-	来（く）れ-	すれ-
V	命令	死ね	飛べ	起きろ	出ろ	来（こ）い	しろ
VI	勧誘	死のう	飛ぼう	起きよう	出よう	来（こ）よう	しよう

語基	語幹	形容詞	繋辞			接尾辞
						否定
I	1, 2	—	・たら-一, ・なら-一	—	—	—
II	中止	よく	・で, ・に[12]	—	・らしく	-なく，-ず二
	3	よかっ-	・だっ-	・でし-	・らしかっ-	-なかっ-
	音便	—	—	—	—	—
III	終止	よい	・だ	・です	・らしい	-ない
	連体		・な	—		-ざる三
IV	仮定	よけれ-	・なら*, ・たる四	—	・らしけれ-	-なけれ-
V	命令	—	—	—	—	—
VI	推量	よかろう	・だろう	・でしょう	・らしかろ	-なかろう

					う	
副詞形	よく	・に，・と四	—	—	—	

一 「-ざる・を / 得-ない」.「本・たら-ざる・を / 得ない」,「静か・なら-ざる・を/ 得ない」

二 単独で中止（古語的），「・に」を伴うこともある.「書かず」,「書かず・に」.また「書かず-じまい」.

三 「・を / え-ない」で用いられる.「書かざるを得ない」.

四 「堂々・と」,「堂々・と / して / いる」,「堂々・たる」.

語基	語幹	接尾辞				
		過去	丁寧	使役	受け身	希望
I	1, 2	—	-ませ-	-せ-[5]	-れ-[6]	—
II	中止	—		-せ[5]	-れ[6]	-たく
	3	—	-まし-	-せ-[5]	-れ-[6]	-たかっ-
	音便	—	—	—	—	—
III	終止	-た[4]	-ます	-せる[5]	-れる[6]	-たい
	連体		—			
IV	仮定	-たら[4]	[-ますれ-]	-せれ-[5]	-れれ-[6]	-たけれ-
V	命令	—	[-ませ]	-せろ[5]	-れろ[6]	—
VI	推量	-たろう[4]	-ましょう（勧誘）	-せよう[5]（勧誘）	-れよう[6]（勧誘）	-たかろう

ここで変化詞及び接尾辞は根幹となる部分とそれに後続する部分からなることが分かる．前者を「**語幹**」と呼ぶことにしよう．日本語の変化詞の語幹は複雑な経緯を経て成立したので，いろいろな要素が混在し，非常にいびつである．変化詞及び接尾辞の語幹のうち接尾辞及び語尾に接続する形を「**語基**」と呼ぶ．

名詞はそれ自体の形が語幹である．例：歯，川，いなか，心，ふるさと，言語［普通の名詞］，ばか，頑固［形容名詞］等々．名詞以外にもいろいろな品詞が語幹をなす．例：わたくし［代名詞］，百，とお（十）［数詞］，また（又）［副詞］，満［連体詞］，が，けれど［接続詞］，おお！，はい［間投詞］等々．動詞，形容詞，繋辞，接尾辞は頭の部分から語尾や接尾辞の前まで，すなわち記号「-」以前までの形が語幹である．例：［動詞］読ま-，読み，読み-，読ん-，読む，読め-，読め，読もう（子音語幹）；起き，起き-，起きる，起きれ-，起きろ，起きよう（母音語幹）；［形容詞］ よく，よかっ-，よい，よけれ-，よかろう；［繋辞］・で，・だっ-，・だ，・な，・なら，・だろう；「接尾辞」-なく，-なかっ-，-ない，-なけれ-，-なかろう，等々．以上のうち末尾に「-」を付けないものは語尾や接尾辞

なしに単独で用いられる形である．これら変化詞の語幹の異なる形は後続の語尾や接尾辞との関係により語基に概括し得る．同じ形がいくつもの語基にまたがるものがあるのは他の言語にも見られることである．例：英語 [bɔiz]（少年）boys（複数通格），boy's（単数属格）；ドイツ語 derselben（同じ—男女中単 2 格，3 格，男単 4 格，男女中複 1 格，2 格，3 格，4 格）；ロシア語 большой / bol'shoj（大きい—男単名格，対格，女単属格，与格，具格，前置格）等々．

上に接尾辞「-た」，語尾「-たり」，「-て」がある種の子音語幹動詞でそれぞれ「-だ」，「-だり」，「-で」と交替すること（すなわち形態素の頭音が有声化する）を述べたが，これらは形の違いにもかかわらず意味がまったく同じであり，それらは**変種**（あるいは**異形態**）と呼ばれる．

変化詞の語幹のうち共通する部分を**語根**と名付ける（語根の末尾にはやはり記号「-」を置くことにする）．例：[形容詞] よい—よ-；[動詞] yom-（子音語幹），oki-, de-（母音語幹）等々．接尾辞は語根の抽出の容易なもの（-na-, -ta-; -sase-, -rare-）も困難なもの（・だ）もある．「・です」，「-ます」の語根は一応 des-, -mas- とでもすることが可能か？ 子音語幹動詞の音便形では語幹から区別された語根を取り出すことが不可能だが，敢えて取り出すとすれば yoɴ- であろうか？ 実は母音語幹動詞の語根は例えば ok-iru, d-eru のように区切ることもまったく不可能なのではない．しかしそうすると動詞「居る」，「得る」はそれぞれ語根が Ø になってしまう．母音語幹動詞の形態論的な分析は歴史的には非常に難しい問題である．不変化詞の語幹の多くは語根でもある．すなわちこの場合語根=語幹である．しかし語根という概念はしばしば歴史的なものとして用いられることがあり，現代語では 1 つの語幹が 2 つ以上の語根からなるとされることがある．例：みなと（港）ーみな（水）＋と（戸）；あなた（貴方）＜あなた（彼方）等々．「ぼかあ＜ぼく・は（僕は）」，「よみゃあ＜読め-ば」の類（融合 fusion による．なおこれは屈折とは異なる）もこれに類するか？[13]

さらに終止形に接尾する「・と」，「・けれど（も）」，「・から」，「・し」（これらは普通「**接続助詞**」と呼ばれる），連体形に接尾する「・のに」，「・ので」（これらも普通「接続助詞」と呼ばれる），終止形，命令形，勧誘形（あるいは推量形）に接尾する「・か」，「・よ」，「・さ」，「・ね」，「・わ」等あるいはそれらの合成形（「・よね」，「・かね」等々）（これらは普通「**終助詞**」と呼ばれる），また引用助詞「・って」等のように名詞に付く助詞（これは普通「**格助詞**」と呼ばれる），名詞その変化詞の中止形，格助詞などに付く「**副助詞**」と併せて，接尾辞及び語尾とともに文法の重要な単位をなす．したがって，助詞は変化詞，不変化詞，接尾辞問わず接尾し得る．また助詞は複数連結し得る（例：「本・だけ・で・は / なく」，「本・だけ・でも」，「する・から・に・は」，「し-なかっ-た・だろう・と・は」等々）．「格助詞」の中には変化詞の連体形に付き得るものもある．

例：「行く・まで」，「美しい・まで・に」，「しずか・な・まで・に」．変化詞に付く「・から」は終助詞と見るべきだろう（「行く・から」，「美しい・から」，「本・だ・から」，「静か・だ・から」）．

ところで日本語には「堂々・と」（副詞形），「堂々・と / して / いる」（終止形，連体形），「堂々・と / し-た」，「堂々・たる」［古形］（連体形）という形を持つ単語がある．普通「堂々」の部分には漢字語が来るが，「きちん」のような固有語もあり得る．「・たる」［古形］（連体形）は「・と / ある」に由来するもので，「・に / ある」に由来する繋辞の「・な」と並行する．漢字語「堂々」は，それに格助詞が付かず，「・は」，「・も」などの副助詞だけが「・と」に接尾し得ることを見ると，一種の形容名詞と見るべきと思われる．「・と / して / いる」，「・と / し-た」は**欠如的な分析的な形**と見るべきだろう．「・たる」［古形］（連体形）は現代日本語では例外的に不変化の助詞と見るしかあるまい（副詞形の「・に」とともに）．「する / ・べからず」［古形］（終止形）を参照せよ．「資格」を表す「・として」は扱いに困る．「・として」とも「・と・して」とも「・と / して」とも取れる．一種の分析的な格助詞とも言える（注 15 参照）．なお次の表を参照．

	連体形	副詞形	連用形	終止形
名詞 （参考）			本・に*（ / なる，する） 本・と*（ / なる，する）	本・だ 本・で* / ある
形容名詞 I	堂々・と* / した 堂々・たる	堂々・と	堂々・と*（ / なる，する）	堂々・と* / して / いる
形容名詞 II	静か・な	静か・に	静か・に*（ / なる，する）	静か・だ 静か・で* / ある

*　この形はさらに副助詞「・は」，「・も」などを従え得る．

分析的な形は**敬語動詞**にたくさんある．*は分離動詞．

非敬語		いる	行く	来る	食べる	飲む	聞く，訊く	尋ねる，訪ねる
敬語	尊敬	いらっしゃる			めしあがる		お-きき・に / なる	お-たずね・に / なる
	謙譲	おる	まいる		いただく		お-うかがい・する*	

見る	会う	する	言う，話す	あげる	くれる
ご-覧・に /	お-会い・に	なさる	おっしゃる	———	くださる

なる	/ なる				
拝見・する*	お-目・に / かかる	いたす	申し上げる	さしあげる	―――

寝る	書く
お-休み・に / なる	お-書き・に / なる，お-書き・くださる*，お-書き・なさる*
―――	お-書き・いたす*，お-書き・申し上げる*

もう一つ問題となるのが副詞末尾に多く見られる「・と」の扱いである．1)「ふっと」,「さっと」,「さっさと」等々はそのまま副詞として用いられるが,「・と」は区切りを入れ得る．2) 擬声擬態語＋「・と」は辞書には「・と」の付かない形が載っているが，実際には必ず「・と」が付く．しかし「・と」は助詞のようにその前に区切りのあることが多い．3)「きちん・と」は上掲の「堂々・と」と似ている．辞書には「・と」の付いた形が載っているが,「・と」の前に区切りを置き得る.「さくさく・と」は辞書には「さくさく」で載っている．これは「きちん・と」と似ているが，さらに「さくさく / する」という形がある．

これらの基本的な要素に基づいて作られた日本語変化詞の文法表（パラディグマ）はおよそ次の如くである．

日本語変化詞パラディグマ

[　]：古風な形
{　}：補充形
*　：(・ば) を接尾させ得る

				動詞	
				非丁寧形	丁寧形
終止	断定	肯定	現	書く	書き-ます
			過	書い-た	書き-まし-た
		否定	現	書か-ない	書き-ませ-ん
			過	書か-なかっ-た	書き-ませ-ん・でし-た
	推量	肯定	現在	書く・だろう ［書こう］	書く・でしょう
			過去	書い-た・だろう ［書い-たろう］	書い-た・でしょう
			現	書か-ない・だろう	書か-ない・でしょう

形		否定	在	［書か-なかろう］	
			過去	書か-なかっ-た・だろう ［書かなかったろう］	書か-なかっ-た・でしょう
	勧誘	肯定		書こう	書き-ましょう
	意志	否定		［書く・まい］	［書き-ます・まい］
	命令	肯定		書け	書き-なさい
		否定		書く・な	{書か-ない-で / ください}
連用形	仮定	肯定	現在	書け-ば, 書く・なら*	［書き-ますれ-ば］ ［書き-ます・なら*］
			過去	書い-たら 書い-た・なら*	［書き-まし-たら］ ［書き-まし-た・なら*］
		否定	現在	書か-なけれ-ば, 書か-ない・なら*	［書き-ませ-ん・なら*］
			過去	書か-なかっ-たら 書か-なかっ-た・なら*	[書き-ませ-ん・でし-た・なら*]
	先行	肯定	話	書い-て	書き-まし-て
			書	書き	
		否定	話	書か-ない-で, 書か-なく-て	書き-ませ-ん-で
			書	書か-ず（・に）	
	同時	肯定		書き-ながら（・も）	
		否定		書か-ない・ながら（・も）	

				形容詞	
				非丁寧形	丁寧形
終止形	断定	肯定	現	よい	よい・です
			過	よかっ-た	よかっ-た・です
		否定	現	よく[14] / ない	よく / ない・です
			過	よく / なかっ-た	よく / なかっ-た・です
	推量	肯定	現在	よい・だろう ［よかろう］	よい・でしょう
			過去	よかっ-た・だろう ［よく / なかろう］	よかっ-た・でしょう
		否	現在	よく / ない・だろう ［よく / なかろう］	よく / ない・でしょう

		定	過去	よく / なかっ-た・だろう ［よく / なかっ-たろう］	よく / なかっ-た・でしょう
連用形	仮定	肯定	現在	よけれ-ば よい・なら	
			過去	よかっ-たら よかっ-た・なら*	
		否定	現在	よく / なけれ-ば よく / ない・なら*	
			過去	よく / なかっ-たら よく / なかっ-た・なら*	
	先行	肯定	話	よく-て	
			書	よく	
		否定		よく / なく-て	
	同時	肯定		よい・ながら（・も）	
		否定		よく / ない・ながら（・も）	
副詞形				よく	

				繋辞（1）	
				非丁寧形	丁寧形
終止形	断定	肯定	現	・だ，・で[14,15] / ある	・です，・で / あり-ます
			過	・だっ-た	・だっ-た・です
		否定	現	・で[14,15] / ない	・で / ない・です
			過	・で / なかっ-た	・で / なかっ-た・です
	推量	肯定	現在	・だろう ［・で / あろう］	・でしょう
			過去	・だっ-た・だろう ［・だっ-たろう］	・だっ-た・でしょう
		否定	現在	・で / ない・だろう ［・で / なかろう］	・で / ない・でしょう
			過去	・で / なかっ-た・だろう ［・で / なかっ-たろう］	・で / なかっ-た・でしょう
	仮定	肯定	現	・なら，・で / ある・なら*	
			過	・だっ-たら	
		否	現在	・で / なけれ-ば ・で / ない・なら*	

連用形		定	過去	・で / なかっ-たら ・で / なかっ-た・なら*	
	先行	肯定	話	・で	[・でし-て]
			書	・で / あり	
		否定		・で / なく-て	[・で / あり-ませ-ん-で]
	同時	肯定		・で / あり・ながら (・も)	
		否定		・で / ない・ながら (・も)	
連体形	肯定	現在		・な	
		過去		・だっ-た	
	否定	現在		・で / ない	
		過去		・で / なかっ-た	
副詞形				・に	

				繋辞 (2)	
				非丁寧形	丁寧形
終止形	断定	肯定	現	・らしい	・らしい・です
			過	・らしかっ-た	・らしかっ-た・です
		否定	現	・らしく[14] / ない	・らしく / ない・です
			過	・らしく / なかっ-た	・らしく / なかっ-た・です
	推量	肯定	現在	・らしい・だろう [・らしかろう]	・らしい・でしょう
			過去	・らしかっ-た・だろう [・らしく / なかろう]	・らしかっ-た・でしょう
		否定	現在	・らしく / ない・だろう [・らしく / なかろう]	・らしく / ない・でしょう
			過去	・らしく / なかっ-た・だろう [・らしく / なかっ-たろう]	・らしく / なかっ-た・でしょう
連用	仮定	肯定	現在	・らしけれ-ば ・らしい・なら*	
			過去	・らしかっ-たら ・らしかっ-た・なら*	
		否定	現在	・らしく / なけれ-ば ・らしく / ない・なら*	
			過	・らしく / なかっ-たら	

形			去	・らしく / なかっ-た・なら*	
	先行	肯定	話	・らしく-て	
			書	・らしく	
		否定		・らしく / なく-て	
	同時	肯定		・らしい・ながら（・も）	
		否定		・らしく / ない・ながら（・も）	

日本語のパラディグマは極めていびつなものである．記号「 / 」を間に持つ形，すなわち自立語 2 単語以上からなる形が随所に見られる（否定形：形容詞「-く / ない」，繋辞「・で / ない」；肯定形：繋辞「・で / ある」）．自立語 1 単語（あるいはさらに＋付属語）からなる文法的な形を「**総合的な形**」と呼び，2 単語（あるいはさらに＋付属語）以上からなる文法的な形を「**分析的な形**」と呼ぶことにする．日本語には「分析的な形」がすこぶる多い[16]．

日本語には同じ形でも接続の強さの異なるものがある．例えば否定の「ない」は自立語の場合もあり（形容詞［不存在］），形容詞や繋辞の場合は分析的な形の中で用いられ（形容詞「/ ない」），動詞の場合は接尾辞であり（「-ない」），意志（否定）「まい」は子音語幹動詞の場合は助詞的であり（「・まい」），母音語幹動詞，不規則動詞の場合は語尾である（「-まい」）．ついでながら形容詞と接尾辞としての「ない」は区別する必要があるとして，文法的には「・まい」も「-まい」と同じく語尾として扱うべきか？ この「-まい」が文語のいわゆる助動詞「-まじ」に由来するものだとしても，現代語で不変化である以上，語尾扱いにしてよい．

(4) 固有語と漢字語，単純語と合成語，接辞

以上日本語の文法的な諸単位を見て来た．これ以降はもっぱら自立語の語幹部分を考察することにする．

それに先立って日本語が主として 1) 本来の日本語の語彙（やまとことば），2) 漢字音からなる語彙（これは中国で作られた語彙だけでなく，日本人の作った語彙も含む），3) それ以外の外国語からの借用語の 3 つの語層からなることを述べなければならない．これらを 1) **固有語**[17]，2) **漢字語**[17]，3) **外来語**と呼ぶことにする．固有語は特別に**擬声擬態語**も語層に取り立てるべきかもしれない．これらのうち 2) は漢字音の存在によってのみ認められる[18]．この語層はそれぞれ音声的特徴を持っており，例えば，日本語の場合，固有語の語頭に /r/ が立つことはない；/p/ は固有語と漢字語の語頭には立たず，漢字語では撥音と促音の後でのみ立ち得る；ただし擬声擬態語では語頭に立ち得る；固有語でも漢字語でも促音は無声子音の前にしか立ち得ない；長母音 /aa/ , /ii/ は漢字語には普通現れな

い；拗音，長母音，撥音，促音は一般に多く漢字語に現れる；外来語には長母音がよく現れる；外来語には促音＋有声子音及び /h/, /r/ が現れ得る等々．従って，一般に日本人は音的特徴だけで当該の単語がどの語層に属するかを容易に知り得る．勿論固有語，漢字語，外来語の合成した語彙もある．

固有語や外来語では1つの自立形態素，すなわち語根からなる単語を**単純語**と呼ぶ．例：根（ね），山（やま），鯨（くじら），静か（しずか），大きい（おおきい），働く（はたらく），コンピューター，一つ，これ，どんな，あの，もっと，しかし，ああ！これは自立語のあらゆる品詞に及ぶ．

現代語の観点から1つと認められる語根が2つ以上からなる単語を**合成語**と言う．例：南（みなみ）－南風（みなみ＋かぜ），西南（にし＋みなみ）．日本語では合成語で第2要素の頭音が濁音化を起こす現象（**連濁**）があり，この場合にこの要素を含む合成語性が一層明瞭になる．例：高い（たか-い）－高潮（たか-＋しお），面高（おも＋だか-），cf. 背高（せい＋たか-）．さらに第1要素（名詞）の**末尾母音 e の a への変化**[19]はこれを含む合成語性を一層際立たせる．例：こえ（声）＋たか-（高）＞こわ＋だか-（声高）．ほかに語幹（あるいは語根）の重複形「こえ＋ごえ（声々）」，「たか＋だか（高々）」参照．連濁や e～a 交替による異なる形，例えば「たか」～「だか」（高），「こえ」～「こわ」（声）も語彙的な変種（異形態）であると言えるが，文法的な変種（異形態）「-た」～「-だ」，「-たり」～「-だり」，「-て」～「-で」等とは厳密な意味の一致が変種間にないことを了解するべきである．

合成語の中には語根の後に何らかの意味を持つ要素が付くものがある．例：しず＋か（静-か） cf. しず＋しず（静々）；かろや-か（軽や-か）cf. かる-い（軽-い）（ほかに「さわ-やか（爽-やか）」，「しめ-やか」，「はな-やか（華-やか）」等を見るに「かろ-やか（軽-やか」かもしれない）．このように語根の後ろに付く要素（「-か」あるいは「-やか」）を「**接尾辞**」と呼ぶ．ほかに「美し-い＞美し-さ」，「静-か＞静-か-さ」，「高-い＞高-め」，「愚痴＞愚痴-る」，「サボ＞サボ-る」等々の名詞や動詞を作る接尾辞参照．接尾辞は「静-か＞静-か-さ」のように2つ以上合成されることがある．ほかに「薄い-，暗-い＞うす＋ぐら-い（薄暗い）」，「寝-る，起き-る＞ね-おき-（寝-起き）」，「揺れ-る，動-く＞揺れ-動く」，「動く ugok-u＞動き ugok-i」等々のような語根の合成，語基の転換による動詞から名詞の造語等々を参照（「寝-起き」も「揺れ-動く」も第1要素の形は語根ではなく第II語基であろう）．

ここに挙げた接尾辞はすべて新しい単語を作るためのもの（**造語接尾辞**）であり，すでに述べた変化する接尾辞，すなわち**文法接尾辞**とは区別されなければならない（今後これらを文法接尾辞と呼ぶことにする）．接尾辞を整理するなら，およそ次のようになる．

造語接尾辞	変化しないもの	-か，-やか，-め［形容名詞］，-さ［名詞］，-みたい［形容名詞］
	変化するもの	-r-（-る）［動詞］，-らしい［形容詞］
文法接尾辞	変化しないもの	-よう，-そう，-みたい［形容名詞］
	変化するもの	-ない，-た，-ます，-せる，-れる，-たい

すでに上に「学生らしい」に2種類あることを述べたが（「学生-らし-い」［形容詞］と「学生・らし-い」［名詞＋繋辞］），形容詞を作る接尾辞「-らし-い」は変化する造語接尾辞に属する．しかし実際には両者の区別は難しい．「学生みたい」も同じように2種類あると言えるが，この「みたい」は変化しない造語接尾辞（形容名詞）と変化しない文法接尾辞の2種類がある．これまた上述した分離動詞の場合は実際には単語としての動詞と文法接尾辞との区別が不分明である．

「らしい」も「みたい」も造語接尾辞として用いられた場合に文法接尾辞（「・らしい」は繋辞）として用いられた場合に劣らず造語力があると思われる（多分それらはほとんどの名詞に付き得るであろう）．文法と語彙の違いを規則性の有無ととらえる人がいるが，それは当たらない．文法においても語彙においても形態素はさまざまな文法的，語彙的制約性の中にあるのであって，極めて使用の限られた形態素であっても文法で扱わなければならないことはあり得るのである．例えば動詞語尾「-しなに」は多分「行く」，「来る」，「帰る」ぐらいの動詞でしか用いられないと思われるが，それらは格助詞「・に」を要求し得るし，接続形（あるいは副動詞形）として記述するべきものである（ほかに例えば，「振り返り-ざま」，「待ち-がてら」等々）．また文法接尾辞だといっても，例えば，「-たち」，「-ら」は有情物にしか付き得ないなどの制約がある．

語幹（語根）の後ろに付く接尾辞に対してその前に付く**接頭辞**が日本語にもある．例：お-くち（御-口），おん-み（御-身）［名詞］，お-しず-か（御-静-か）［形容名詞］，お-うつくし-い（御-美し-い）［形容詞］；ま-なつ（真-夏）［名詞］，ま-あたらし-い（真-新し-い）［形容詞］，まっ-しろ（真っ-白）［形容名詞］，まん-なか（真ん-中）［名詞］；「おお-おとこ（大-男）」，「こ-いぬ（子-犬）」［名詞］．ここで「お-」～「おん-」（御-）；「ま-」～「まっ-」～「まん-」（真-）は変種（異形態）である．本来の日本語には接頭辞がなかったと思われるが，この特徴は一般にアルタイ系諸言語に共通している．「お-（御-）」，「ま-（真-）」，「おお-（大-）」，「こ-（子-）」は本来は自立語だったと思われる．つまり「語幹＋語幹」＞「接頭辞＋語幹」と言う変化を遂げたものと考えられる．さらに次の例を参照：「ぶち-のめす」～「ぶっ-ころす」～「ぶん-なぐる」．これも語幹「ぶち-」が前置詞化（～「ぶっ-」～「ぶん-」）したものと思われる．これを**促音化**と呼ぶことにしよう．逆に合成語の第2要素の接尾辞化も見られる．例：「ぬす-っと（盗人）」，「あき-んど（商人）」＜「-ひと」；「僕-んち」，「あいつ-んち」，「岡田-んち」は「・の

/ うち」の**縮約形**であろう．縮約形は縮約の前後の形態素を 1 つにしてしまう．例：こん-畜生，こん-にゃろう．以上の接頭辞＋語幹（語根）も語幹（語根）＋接尾辞もすべてアクセントの点で単純語の場合と同様のまとまりを成していることが分かる．

漢字語を構成する**漢字音**（あるいは**字音**），すなわち漢字 1 字の漢字音は必ず 1 音節か 2 音節，厳密に言えば，1 モーラ乃至 2 モーラからなる．圧倒的多数は 2 モーラである．長母音，短母音＋撥音，短母音＋促音（以上 1 音節 2 モーラ）の漢字音以外（2 音節 2 モーラ）は「短母音＋ツあ　るいはチ」，「短母音＋クあるいはキ」からなるものしかない．漢字音には漢音，呉音その他があり，さらにそれぞれ音声的特徴がある．

漢字 1 字からなる漢字語は非常に少ない（例：句［く］，文［ぶん］，美［び］，善［ぜん］，列［れつ］，脳［のう］）．これらの一部は固有語あるいは固有語に近い語感を持つものがある（例：餡［あん］，絵［え］，得［とく］，本［ほん］）．新聞などでは 1 字からなる国名や地名の略語が用いられる．例：日，米，英，欧．圧倒的多数は漢字 2 字からなる（したがって，2 モーラから 4 モーラまで）：自己［じ-こ］，多数［た-すう］，高度［こう-ど］，単独［たん-どく］，発達［はっ-たつ］等々．漢字 2 字からなる単位はその構成素（2 つの漢字形態素）の第 1 形態素と第 2 形態素の関係がさまざまである．1) 修飾語＋被修飾語（形容詞＋名詞）「高山（こう-ざん）」，2) 状況語＋動詞「確立（かく-りつ）」，「手動（しゅ-どう）」，3) 述語＋補語「読書（どく-しょ）」，4) 主語＋述語「主導（しゅ-どう）」，5) 並置「さん-が（山河）」（名詞），「こう-てい（高低）」（形容詞），「かい-せつ（開設）」，「はっ-てん（発展）」（動詞）等々．ほかに 6) 「ぶ-どう（葡萄）」というのがあるが，これは 1) ～ 5) のように 2 漢字 ＝2 形態素であるのに対して 2 漢字 ＝ 1 形態素である点が異なる．いずれにせよ 2 漢字からなる漢字語の統合体を $(1+1)^{20}$ と表すと，次のような前置的な要素及び後置的な要素との結合が生ずる．

(1+1)	(会議)	(日本)	(健全)
{1+(1+1)}	{大＋(会議)}	{駐＋(日本)}	{不＋(健全)}
{(1+1)+1}	{(会議)＋場}	{(日本)＋国}	{(健全)＋性}
1+{(1+1)+1}	大＋{(会議)＋場}	駐＋{(日本)＋国}	
{1+(1+1)}+1			{不＋(健全)}＋性

さてこれらは各々アクセントの点でもひとまとまりを成していることが分かる（「駐＋日本」，「駐＋日本＋国」の場合「駐-」の後でポーズを置く発音もあり得る）．(1+1) に前接する 1+ を漢字語における接頭辞（大-，駐-，不-），後接する +1 を漢字語における接尾辞（-場，-国，-性）と呼ぶことが出来る．さらに「葡萄＋酒」は「葡萄」が 2 漢字 1 形態素であるにもかかわらず，アクセントと意識

の点では2漢字2形態素の場合とまったく同じである．さらに次の例を参照．

1+(1+1)+1　　軽＋{(機関)＋銃}　重＋{(機関)＋銃}

大＋{(会議)＋場}　小＋{(会議)＋場}

(1+1){(1+1)+1}　(軽重)＋{(機関)＋銃}　(大小)＋{(会議)＋場}

ここで (軽重), (大小) がもはや接頭辞としては働いておらず，普通の (1+1) とまったく同じ機能を果たしていることを参照せよ．次の例をも参照せよ．

{1+(1+1)}　{反＋(韓国)}　{親＋(中国)}　{駐＋(日本)}

(1+1)　(反韓)　(親中)　(駐日)

また1漢字形態素に接頭辞的な漢字あるいは接尾辞的な漢字が付いても，2漢字全体の扱いは (1+1) と同じになる．全＋文 ＞ (全文), 全＋会 ＞ (全会)；文＋末 ＞ (文末), 会＋場 ＞ (会場)．つまりこのことは (1+1) の構造の中には接頭辞も接尾辞も普通あり得ないことを意味する

確かに (1+1) という構造の漢字語においても，第1の漢字が接頭辞的，第2の漢字が接尾辞的なものはある．例：[接頭辞的]：「駐-」ー駐日，駐米，駐英；「親-」ー親日，親米，親英；「反-」ー反日，反米，反英；「全-」ー全国，全県，全米，全会；[接尾辞的]：「-国」ー中国，清国，米国，英国；「-員」ー会員，団員，社員；「-長」ー会長，団長，社長；「-的」ー線的，全的，人的，質的；「-素」ー水素，炭素，臭素，元素．しかしこのような従位的結合のほかに，(等位的結合)「大小」,「上下」,「昇降」,「読書」(動詞＋補語),「自営」(主語＋述語) 等々さまざまなものも漢字語では同じ類型のものと扱ってよいと思う．

ただし「各 / 文」,「各 / 会」　では「各」はアクセントの点でも区切りの点でも接頭辞的にふるまう)．われわれはかくして漢字語においては (1+1) を固有語における単純語とほぼ同じく扱うこととする．

数詞は漢字語の中でも例外をなす．「漢字1字の数詞＋漢字1字の助数詞」ー「二個 (に-こ)」,「五本 (ご-ほん)」,「六冊 (ろく-さつ)」．

漢字語と固有語は相対的に構造も異なるものではあるが，両者共通の概念も模索する必要がある．以後この立場を貫くことにする．

漢字語においても連濁と促音化が起こる．(A) 連濁は限られた場合にだけ起こる．(1) 数詞「三 (さん)」,「千 (せん)」,「万 (まん)」の後の一部の助数詞：三階 (さん-がい～さん-かい), 三本 (さん-ぼん), 千本 (せん-ぼん), 万本 (まん-ぼん), 三百 (さん-びゃく), 三国 (さん-ごく), 三帖 (さん-ぢょう), 三寸 (さん-ずん), 三尺 (さん-じゃく)：(2) 古い漢字語 (恐らく末尾子音 m, n, ŋ の影響によるもの．なお上記の「三 (さん)」は本来 (さ m))：音声 (おん-じょう) [音 (おん) は本来 (お m)], 根性 (こん-じょう) [根 (こん) は本来 (こ n)], 丁子 (ちょう-じ) [丁 (ちょう) は本来 (ちゃう＜ちゃう＜ちゃ ŋ)]．(B) 古い漢字語で末尾子音 m, n が次の音節にもまたがるものがある：反応 (はん-のう)

［反（はん）は本来（はn）］，天皇（てん-のう）［天（てん）は本来（てn）］，三位（さん-み）［三（さん）は本来（さm）］．普通はこの現象は起きない：半音（はん-おん），音韻（おん-いん）．(C)「撥音＋ハ行」の場合「ハ行」は「パ行」と変わる（これを仮に**p化**と名付けておこう．勿論歴史的には古いpがここで残り，他の位置でp ＞ f ＞ h ＞ ある場合に消滅という経過を経たであろうが，現代語ではhがある位置でpと交替すると考えてよい）：音波（おん-ぱ），安否（あ-んぴ），金粉（きん-ぷん），身辺（しん-ぺん），遠方（えん-ぽう）．(D) 促音化．これが最も多い．促音化の後の「ハ行」は必ず「パ行」と変わる）．次の場合がある．(1)「ツ，チ＋カ行，サ行，タ行，ハ行」：撤去（てっ-きょ），鉄柵（てっ-さく），徹底（てっ-てい），絶壁（ぜっ-ぺき），一見（いっ-けん），一生（いっ-しょう），一致（いっ-ち），一般（いっ-ぱん），(2)「ク，キ＋カ行」：楽器（がっ-き），学校（がっ-こう），石器（せっ-き），斥候（せっ-こう）．たまにこうならないものがある．的確，適格（てき-かく / てっ-かく）．また「ク＋ハ行」で促音化を起こすものがたまにある．北氷洋（ほっ-ぴょうよう）［なお南氷洋（なん-ぴょうよう）参照］，北方（ほっ-ぽう）．なお「前半（ぜんはん〜ぜんぱん）」参照．

ついでながらp化は撥音の後と促音化の後にあらわれる．固有語と漢字語では語頭にpが現れない所以である．pは語頭では擬声擬態語と外来語のみ現れる．

漢字語の内部の位置による促音化とp化の分布に関しておよそ次の通りとなる．

語幹	接頭辞＋語幹	語幹＋接尾辞
劣化（れっか）		系列化（けいれつ-か）
鉄線（てっせん）		国鉄線（こくてつ-せん）
接点（せってん）		結節点（けっせつ-てん）
出費（しゅっぴ）		機密費（きみつ-ひ）
脱出（だっしゅつ）	脱出獄（だつ-しゅつごく）	
殺傷（さっしょう）	殺処分（さつ-しょぶん）	
国家（こっか）		愛国歌（あいこっ-か，あいこく-か）
俗化（ぞっか）		世俗化（せぞっ-か，せぞく-か）
学会（がっかい）		音楽会（おんがっ-かい，おんがく-かい）
悪漢（あっかん）	悪感情（あっ-かんじょう，あく-かんじょう）	
鉛筆（えんぴつ）		万年筆（まんねん-ひつ）
乱費（らんぴ）		人件費（じんけん-ひ）
年表（ねんぴょう）		一覧表（いちらん-ひょう）
戦犯（せんぱん）	真犯人（しん-はんにん）	

促音化とp化は「接頭辞＋語幹」の間と「語幹＋接尾辞」の間では起きない傾向がある（ただし「クキ＋カ行」の場合はそうでない人もいる）．北氷洋（ほっ-ぴょうよう），南氷洋（なん-ぴょうよう）は例外的である．

数詞の場合は幾分異なる「数詞＋助数詞」の構造において2つの要素の間で次の変化が起きる．(1)「ク（六［ろく］，百［ひゃく］）」＋カ行，ハ行（＞パ行），(2)「ウ（十［じゅう］），「ツ，チ（一［いち］，八［はち］）」＋カ行，サ行，タ行，ハ行（＞パ行）」．

	-回（-かい）	-隻（-せき）	着（-ちゃく）	-歩（-ほ）
六（ろく）	**ろっ-かい**	ろく-せき	ろく-ちゃく	**ろっ-ぽ**
百（ひゃく）	**ひゃっ-かい**	ひゃく-せき	ひゃく-ちゃく	**ひゃっ-ぽ**
十（じゅう）	**じゅっ-かい**	**じゅっ-せき**	**じゅっ-ちゃく**	**じゅっ-ぽ**
一（いち）	**いっ-かい**	**いっ-せき**	**いっ-ちゃく**	**いっ-ぽ**
八（はち）	**はっ-かい**	**はっ-せき**	**はっ-ちゃく**	**はっ-ぽ**
三（さん）	さん-かい	さん-せき	さん-ちゃく	**さん-ぽ**
千（せん）	せん-かい	せん-せき	せん-ちゃく	**せん-ぽ**
万（まん）	まん-かい	まん-せき	まん-ちゃく	**まん-ぽ**

「四（よん）」，「七（なな）」は普通漢字音を用いない．これらは助数詞との結合においていかなる音的変化も起こさない．

「一」～「九」は前に「十（じゅう）」及び「百（ひゃく）」を加え得る．

「十」，「百」，「千」，「万」は前に数詞（二～九）を加え得る．「万（まん）」はかならず前に数詞「一」を伴う．「一万（いちまん）」．「千（せん）」は「一千（いっせん）」もある．

数詞の連続における切れ目は次の通りである．

一回～十回；十一回～二十回；三十回，四十回，五十回，六十回，七十回，八十回，九十回；百回；百一回～十回；二百回～九百回；千回；一千回～九千回；一万回～九万回．

二十 / 一回～二十 / 九回，三十 / 一回～三十 / 九回，四十 / 一回～四十 / 九回，五十 / 一回～五十 / 九回，六十 / 一回～六十 / 九回，七十 / 一回～七十 / 九回，八十 / 一回～八十 / 九回，九十 / 一回～九十 / 九回；百 / 十一回，三万 / 三千 / 三百 / 三十 / 三万 / 三千 / 三百 / 三十 / 三回

「億」以上の数になると，促音化は起こさないようである．一億回（いちおく-かい），一億歩（いちおく-ほ）．

助数詞が固有語及び外来語だと，また様相が部分的に変わる．

	-組	-株	-粒	-柱

	(-くみ)	(-かぶ)	(-つぶ)	(-はしら)
一（いち）	いちくみ	いちかぶ ひとかぶ	ひとつぶ	ひとはしら
六（ろく）	**ろっくみ**	**ろっかぶ**	ろくつぶ	ろくはしら
八（はち）	はちくみ， **はっくみ**	**はっかぶ**	**はっつぶ**	はちはしら， やはしら
十（じゅう）	**じゅっくみ**	**じゅっかぶ**	**じゅっつぶ**	**じゅっはしら**
百（ひゃく）	**ひゃっくみ**	**ひゃっかぶ**	ひゃくつぶ	ひゃくはしら

	センチ	キロ	フィート	ホン
一	**いっセンチ**	いちキロ	いちフィート	いちホン
六	ろくセンチ	**ろっキロ**	ろくフィート	ろくホン
八	**はっセンチ**	はちキロ	はちフィート	はちホン
十	**じゅっセンチ**	**じゅっキロ**	**じゅっフィート**	**じゅっホン**
百	ひゃくセンチ	**ひゃっキロ**	ひゃくフィート	ひゃくホン

ハ行促音は外来語に現れるのが原則だが（バッハ，チューリッヒ），このように助数詞との結合では外来語だけでなく固有語にも現れる．ほかに「十針（じゅっはり）」，「十尋（じゅっひろ）」参照．

数詞に前置される接頭辞とも言うべきものとして唯一「第（だい）」があるのだが，「第（だい）」＋「一」～「十」（「七」は「しち」，「九」は「く」も，「四」は「し」も）はアクセントの観点からも全体で1単語のようになる．ところが「第（だい）」にこれ以外の数詞が付くと，切れ目の点でもアクセントの点でもあたかもこれ自体が1単語のようにふるまう．「第十一（だい / じゅういち）」，「第百（だい / ひゃく）」，さらにこれらあるいは「第（だい）」＋「一」～「十」に助数詞が付く時も同じである．「第八（だい-はち）」－「第八交響曲（だいはち-こうきょう-きょく）」（全体でひとまとまり），「第八回（だい / はっ-かい）」－「第八回大会（だい / はっかい-たいかい）」（「はっかい-たいかい」はアクセントの点でひとまとまり）．これらを今後次のように表示することにしよう．「第-八」，「第-八=交響-曲」，「第｜八-回」，「第｜八-回=大会」．これらをひとまとまりとして統合しているのはアクセントであるが，さらに連濁，末尾母音 **e** の **a** への変化，縮約，促音化，p 化等々も統合に参加している．

(5) 前置的要素，後置的要素

最後の数詞を含む語幹と接辞等の結合の形式を見たが，さらに拡大して次の場合を見て行こう．

(1) で見た新聞記事の一節に戻る．「｜」，「/」，「//」は切れ目をあらわし，アクセントによってひとまとまりとなる．「｜」は前置的な要素の後に，「//」は文節の境界，「/」は「//」よりも小さい単位，「・」は付属語の頭に付す．「-」は接辞と語幹の境界（接頭辞と語幹の間，語幹と接尾辞の間），語尾と文法接尾辞の頭に付す．_____は分析的な形．「=」はこの前後の単語が合わさってアクセント単位をなすが（つまり「=」の位置に普通は切れ目を置かないが，ゆっくり話すときは切れ目を置くこともあり得る），「=」の前後はそれぞれ単独の単語という意識がある．日本語をローマ字書きする際には，「/」，「//」，「=」，「・」の位置で分かち書きをし，「-」の位置は続け書きをするであろう．ローマ字書きに際して「｜」と「-」は場合によってハイフン「-」を挿入することもあり得る．

「第｜2-次 / 世界=大戦-後・に // 旧-ソ連・が // 現在・の // 北-朝鮮 / 東部・に // 開い-た //「第 53（第｜五-十-三） / 送還=収容所」・で // 死亡した // 日本-人 / 抑留-者 //869 人（八-百｜六-十-九-人）・の // うち，//98 人（九-十｜八-人）は // 当初・の // 開設-地・の // 興南 //（現在・の // 北-朝鮮 // 咸興（ハムフン）-市 // 興南（フンナム）=地区）・で・は // なく，// 移送-先・の // ソ連-領-内 // ナホトカ・で // なくなっ-て // い-た // こと・が // 分かっ-た．」

まず単語レヴェル（/ あるいは // を越えないもの）で合成語を見て行くと，次のものが取り出される．(1) 接頭辞＋名詞：北-朝鮮，(2a) 名詞＋接尾辞：大戦-後，日本-人，抑留-者，開設-地，咸興（ハムフン）-市，移送-先，2-次，六-十-九-人，八-人，(2b) 名詞＋接尾辞＋接尾辞：ソ連-領-内．このように接尾辞はダブり得る．

次に単語の枠を超えて（/ あるいは // を越えるもの）接辞的要素と語幹的要素を見ていくと，およそ次のようになる．(A) 接頭的要素＋名詞：(1) 接頭辞（｜）数詞：第｜2-次，(2) 接頭的名詞 (=,/,//) 名詞：送還=収容所，世界=大戦；北-朝鮮 / 東部，ソ連-領-内 // ナホトカ；北-朝鮮 // 咸興（ハムフン）-市 // 興南（フンナム）=地区）；第｜2-次 / 世界=大戦-後；第｜五-十-三 / 送還=収容所 名詞＋接尾的要素：興南（フンナム）=地区，(B) 単語（語幹）が対等に並んだもの（名詞（/,//,｜）名詞）：日本-人 / 抑留-者；八-百｜六-十-九-人，九-十｜八-人；日本-人 / 抑留-者 // 八-百｜六-十-九-人．

「第｜2-次 / 世界=大戦-後」を見ると，接尾辞「−後」は名詞「大戦」に付いているとはいえ，意味的には「第｜2-次 / 世界=大戦」というまとまり全体に付いたと言ってよい．一般に接尾辞はこのような機能を持っていることが多い．「第｜2-次 / 世界=大戦-前」，「第｜2-次 / 世界=大戦-中」参照．

「第｜2-次 / 世界=大戦」は区切りとしては 3 つ（3 つのアクセント単位）ある

と言えるが，少なくとも3つの単語（「第2-次」，「世界」，「大戦」）あるいは2つの単語（「第2-次」，「世界大戦」）からなると言える．ここで果たして「世界大戦」が1単語であるかどうかが問題となる．′___ ___′ ___′ ___(′) ___(′)

漢字語のアクセント単位について簡単に述べる．アクセント核はアクセント核のあるモーラの後に「′」で示す．本来アクセント核があるが，単語結合でアクセント核を失うものを「(′)」で示す．本来アクセント核がないが，単語結合でアクセント核が生ずるものを「˺」で示す．

(1) ___ ＋ ___ → ___′___ (___ =˺___)

「ぼうくう（防空）」＋「えんしゅう（演習）」→「ぼうくうえ′んしゅう」（ぼうくう=え˺んしゅう）

(2) ___′___ ＋ ___ → ___′___ (___ =˺___)

「こく′がい（国外）」＋「ついほう（追放）」→「こく(′)がい=つ˺いほう」

(3) ___ ＋ ___′___ → ___′___ (___ = ___′___)

「おかだ（岡田）」＋「せんせ′い（先生）」→「おかだせんせ′い」（「おかだ=せんせ′い」）

(4a) ___′___ ＋ ___′___ → ___′___ (___′___ = ___(′)___)

「お′か（岡）」＋「せんせ′い（先生）」→「お′かせんせい」（お′か=せんせ(′)い）

(4b) ___′___＋___′___ → ___′___ (___(′)___ =___′___)

「め′いじ（明治）」＋「い′ご（以後）」→「めいじい′ご」（め(′)いじ=い′ご）

「イ′ンチキ」＋「しゅ′うきょう（宗教）」→「インチキしゅ′うきょう」（イ(′)ンチキ=しゅ′うきょう）

(4c) ___′___ ＋ ___′___ → ___′___ | ___′___

「こ′だい（古代）」＋「にほ′ん（日本）」→「こ′だい | にほ′ん」これは呼気段落（切れ目）の少ない発話では___′___となることもある（「こ′だい | にほ(′)ん」）．

(4d) ___′___ ＋ ___′___ → ___˺___˺ これは固有語にだけ現れる．

「あ′お（青）」＋「おに′（鬼）」→「あおおに」（あ(′)お-おに(′)）

上のうち（4c）だけが結合の様式が異なる．

固有語は漢字語と少し様相が異なる．

「おや（親）」＋「うなぎ」→「おやう′なぎ」（おや-う˺なぎ）

「おや（親）」＋「いぬ′（犬）」→「おやいぬ」（おや-いぬ(′)）

「おや（親）」＋「ね′こ（猫）」→「おやねこ」（おや-ね$^{(\prime)}$こ）

ここで語幹あるいは語幹による合成の類型を以下に示す（* 印は生産性の高い語彙的な類型を示す．－ は連濁を起こす箇所を示す）．

形容詞語根：**（文法的）**たか-そう（高そう）［形容名詞］，よ-さ-そう［形容名詞］；

形容詞語根：**（語彙的）**［**接頭辞付け**］まっ-くろ（真っ黒）［形容名詞］；［**接尾辞付け**］よ-さ*［名詞］，たか-さ*（高さ）［名詞］，たか-め*（高め）［形容名詞］，おおき-な（大きな），ちいさ-な（小さな）［以上連体詞］，かろ-やか（軽やか），あぶな-げ（危なげ）［形容名詞］，ふか-まる（深まる），ふか-める（深める），うす-すぎる（薄すぎる），よ-さ-すぎる［以上動詞］；［**語根合成**］たか-ひく（高低）［名詞］，たか-だか（高々）［副詞］，こわ-ごわ（・と）［副詞］，あお-あお（青々）・と，さむ-ざむ（寒々）・と［以上形容名詞］，たか-ね（高値）［名詞］，うす-みどり（薄緑），たか-おか（高岡）［名詞］，うす-あかり（薄明り）［名詞］，うす-ぐらい（薄暗い）［形容詞］，あま-ずっぱい（甘酸っぱい）［形容詞］，うすら-わらい（薄ら笑い）［名詞］；

形容詞語幹：**（文法的）**［**接頭辞付け**］お-たかい（お高い）［敬語語幹］；

形容詞語幹：**（語彙的）**［**接頭辞付け**］ま-あたらしい（真新しい），ど-ぎつい［形容詞］；［**語根合成**］たか-だか（高々）［副詞］，ちか-ぢか（近々）［副詞］，こわ-だか（声高）［形容名詞］，ふる-さと（古里），うす-むらさき（薄紫）［名詞］；おそ-ざき（遅咲き），急-ごしらえ［名詞］．

形容名詞語根：**（語彙的）**［**接頭辞付け**］ド-派手［形容名詞］；［**語根合成**］しず-しず・と（静々と）［副詞］；しず-ごころ（静心），しず-おか（静岡）［名詞］；直接［副詞，・の（連体的），・に（副詞）］，直接=間接［・の（連体的），・に（副詞）］；［**接尾辞付け**］しず-か（静か），しずか-め*（静かめ）［形容名詞］；

形容名詞語幹：**（文法的）**［**接頭辞付け**］お-しずか（お静か），御-迷惑［以上敬語語幹］（・に / する，なる）；［**接尾辞付け**］しずか-そう（静かそう［形容名詞］，がさつ-そう［形容名詞］，迷惑-そう［形容名詞］；

形容名詞語幹：**（語彙的）**［**接尾辞付け**］しずか-さ*（静かさ）［名詞］，がさつ-さ*［名詞］，頑固（・だ，・な，・に），直接-的*（連体的，副詞；・だ，・な，・に）［形容名詞］；しずか-すぎる（静かすぎる）*，がさつ-すぎる*，頑固-すぎる*，直接-的-すぎる*［動詞］［**語幹合成**］から-元気［名詞］，静-岡［名詞］，直接的=間接的*［・だ，・な，・に］［形容名詞］．

動詞語幹（連用形）：**（文法的）**［**接頭辞付け**］お-書き［敬語語幹］［命令形，述語形・だ，・の，・に / なる，・する，・いたす，・くださる，・申し上げる］；［**接尾辞付け**］書き-そう［形容名詞］（書か-れ-そう，書か-せ-そう，書か-な-さ-そう，書き-た-そう），書き-得る；［**語幹合成**］書き-書き［接続形］，書き-書

き・する［分離動詞］；

動詞連用形＋名詞（文法的）［動詞の接続形とみなすべきもの］；書き-がてら[21]*，書き-ざま*，書き-次第[21]*，書き-しな*，書き-際・に*，書き-ついで・に*；

動詞語幹（連用形）：（語彙的）動き，話し，問い，答え，遊び，試し，闘い，試み，ダブり［名詞］；［**接頭辞付け（接頭辞＋動詞連用形）**］お-話し，お-答え［名詞．敬語語幹］；（**接頭辞＋動詞**）ぶち-のめす，ぶん-なぐる，ぶっ-殺す，ぶっ-ちゃける；すっ-飛ぶ，すっ-ころぶ［以上動詞］；

［**語幹合成**］

［**動詞派生形容詞（動詞連用形＋形容詞）**］書き-づらい*，書き-にくい*，書き-よい*，書き-がたい*，書き-足りない*，書き-かねない*；書き-っこ-ない*，書け-っこ-ない*；

［**動詞派生動詞（動詞連用形＋動詞）**］書き-やがる*，書き-始める*，書き-終える*，書き-終わる*，書き-とおす*，書き-きる*，書き-おおせる*，書き-続ける*，書き-出す*，書き-かける*，書き-止む*，書き-誤る*，書き-損なう*，書き-そびれる*，書き-損じる*，書き-違える*，書き-急ぐ*，書き-足す*，書き-尽くす*，書き-進む*，書き-進める*，書き-遂げる*，書き-直す*，書き-慣れる*，書き-抜く*，書き-遺す*，書き-耽る*，書き-呆ける*，書き-誇る*，書き-あきる*，書き-あぐねる*，書き-まどう*，書き-まわる*，書き-まわる*，書き-忘れる*，書き-疲れる*，書き-遅れる*，書き-惜しむ*，書き-及ぶ*，書き-替える*，書き-かける*，書き-かねる*，書き-比べる*，書き-渋る*，書き-収める*，書き-控える*，書き-まくる*，書き-漏らす*，書き-すぎる*，書きやがる*；奪い-取る，読み-解く，返り-咲く，跳ね-返す，書き-とめる，書き-溜める，流れ-落ちる，流れ-下る，流れ-着く，流れ-込む，突き-落とす，咲き-こぼれる，咲き-誇る，這い-上がる，這い-登る，受け-取る，押し-つぶす，押し-合う，押し-入る，押し-出す，取り-寄せる，落ち-着く；日本語は動詞派生動詞が極めて豊富である．その多くは辞書に登録されていない．

［**動詞派生動作名詞（動詞連用形＋動詞連用形）1**］書き-誤り*，書き-急ぎ*，書き-収め*，書き-終わり*，書き-替え*，書き-かけ*，書き-違い*，書き-比べ*，書き-渋り*，書き-そこない*，書き-損じ*，書き-違え*，書き-疲れ*，書き-直し*，書き-残し*，　書き-始め*，書き間違え*，書き-忘れ*；書き-漏らし*，書き-出し，書き-すぎ*；落ち-着き［以上名詞］，引き-続き［副詞］；

［**動詞派生動作名詞（動詞連用形＋動詞連用形）2**］昇り-降り，上げ-下げ，読み-書き，飲み-食い，生き-死に，見-聞き，やり-とり（多くは「・する」を接尾して分離動詞を作る）；浮き-沈み：

［**動詞派生名詞（動詞連用形＋名詞）1**］書き−甲斐*，書き-方*，書き-癖*，書き-具合*，書き-頃*，書き−ざま*，書き-自慢*，書き-手*，書き−時*，書き−どく*，書き−どころ*，書き-友達*，書き-場所*，書き-魔*，書き-もの；さすらい−びと；飲み−薬，追い-風；

［**動詞派生名詞（動詞連用形＋名詞）2**］（多く**「・が / よい」，「・が / 悪い」，「・が / ある」，「・が / ない」**という構造で用いられる）書き-よう*，書き−がって*，書き−ごたえ*，書き−心地*，書き-っぷり*，書き−ぶり*；

［**動詞派生名詞（動詞連用形＋名詞，動詞連用形）3**］（**述語的に用いられる名詞**）書き-がち*，書き−上手*，書き-た-げ*，書き−下手*［形容名詞］，書き−気味*，書き−どおし*，書き-っきり*，書き-っぱなし*，書き−づめ*，書き-放題*，書き-まくり*［名詞］；

［**動詞派生副詞**］（重複）追い−追い；

［**接尾辞付け（名詞＋動詞連用形）**］［**接尾的**］酒−好き*，酒−嫌い*，色−刷り，言葉-調べ*，女−狂い*，根-競べ，田舎−暮らし*，油−切れ*，夏-休み，夫-持ち*，子供-向け*，泥-まみれ*，酒−浸り，水−浸し，仲間-外し*，仲間-外れ，村-はずれ*，神−頼み，大島-育ち*，おやじ−仕込み*，親−代わり*；

［**接尾辞**］三日−越し*，海−沿い*，父−宛*，兄−寄り*；

［**接頭辞的**］試し−切り，試し−書き［以上名詞．・する］．

名詞語幹（文法的）：［**接頭辞付け**］お-手紙［敬語語幹］；［**接尾辞付け**］子供−たち，子供−ら，子供−ども［以上多数性］；本-みたい［形容名詞］，本-らしい，本-くさい，本-っぽい［以上形容詞］；

名詞語幹（語彙的）：（固有語）

［**接頭辞付け**］真−冬，真ん−中，真っ−昼間，ど−真ん−中，す−うどん，すっ−ぱだか（素っ裸，），き−むすめ（生娘），お−うし（雄牛），こ−うま（仔馬），おお−あたま（大頭），大−阪，えせ−（似非=学会）*，［以上名詞］；

［**接尾辞付け**］三日−ぶり*，三日−ごと*，三日−ずつ*，三日−おき*，山田−さん*，ニャン−こ，花−子*，鬼−ごっこ*，地域−ぐるみ*，アメリカ−くんだり*［以上名詞］，曇り−がち［形容名詞］；垢−じみる*，春−めく，勢い−づく，サボ−る［以上動詞］，おせっかい−がましい*［形容詞］；

［**語幹合成**］ちち−はは（父母），つき−ひ（月日），やま−かわ（山川），あと−さき（後先）［以上名詞］；つね−づね（常々），さき−ざき（先々）［以上副詞］；ひも-解く，根−付く，手−がける［以上動詞］；手−ごたえ［名詞］，分-刻み，しり-つぼみ［名詞］，型-破り［形容名詞］；先-送り［名詞］（・する）［分離動詞］；

［**前置的**］おす−ぶた*（雄豚），めす−ぶた*（雌豚），おや−うし*（親牛），［**後置的**］ふゆ−がた*（冬型），ふゆ−ごろ*（冬頃），ふゆ−あたり*（冬あたり），着物−姿*，川−向う*，おもちゃ−箱，釣り−バカ*，大和−魂，取引−先，生きも

の-係［以上名詞］；おやじ-仕込［名詞］；売上-高，身-近［以上名詞］；

名詞語幹（漢字語） ほとんどが名詞あるいは形容名詞，一部は副詞（「続々（・と）」）

名詞語幹（文法的）：（漢字語）［**接頭辞付け**］お-電話，御-本，御-冥福［敬語］；諸-新聞［多数性］；［**接尾辞付け**］会員-たち，会員-ら，会員-ども［以上多数性］；

名詞語幹（語彙的）：（漢字語）

［**接頭辞付け**］亜-熱帯*，異-次元*，逆-輸出*，金-メダル*，高-濃度*，地-酒*，ど-根性，真-人間［以上名詞］；

［**接尾辞付け**］祖国-愛*，予算-案*，銀行-員*，動物-園*，可能-性*，日本-国*，商店-街*，天道-教*［以上名詞］；野球-好き*，卓球-嫌い*，亭主-持ち*，単語-調べ*，電池-切れ*，［以上名詞］；会計-係*［名詞］，病気-がち，自信-たっぷり［形容名詞］；収穫-高［名詞］；干渉-がましい，興味-深い［形容詞］；左翼-がかる，お-説教-じみる，講義-めく，活気-づく，愚痴-る［以上動詞］，危険-きわまる［動詞］，危険-極まり-ない［形容詞］，野菜=市場*［名詞］；

［**語幹合成**］［**前置的**］関連=法案*，客員=研究員*，国際=関係*，古典=音楽*，南部=朝鮮*，［**後置的**］郷土=意識*，自動-車=運転手*；

名詞語幹（文法的）：（外来語）［**接頭辞付け**］お-ビール［敬語］；

名詞語幹（語彙的）：（外来語） ビール，ジュース，ジャム，ベッド，ラジオ，ドラマ，クラス，センター，トンネル，トラック，オリエント［以上名詞］；

［**接頭辞付け**］地-ビール*［名詞］；

［**接尾辞付け**］ドラマチック-性，ナイーヴ-さ，カラフル-さ［以上名詞］；キリスト-教*，レストラン-街*［以上名詞］；

［**語幹合成**］モンスター=ストライク，チーフ=アテンダント［以上名詞］；［**接頭的**］簡易=ベッド*，携帯=ラジオ*，連続=ドラマ*［以上名詞］；［**接尾的**］課長=クラス*，イチゴ=ジャム*，野菜=ジュース*，文化=センター*，関門=トンネル*，オリエント=特急*，トラック=運転手*，［以上名詞］.

形容名詞語幹（語彙的）：（外来語） ドラマチック，ナイーヴ，カラフル（・だ，・な，・に）.

代名詞，代形容名詞，代副詞，代連体詞語幹（語彙的）：（固有語） なに～なん（・の，・と）；［**反復**］なに-なに，だれ-だれ，どこ-どこ；［**語幹合成**］あれ-これ，あそこ-ここ，あっち-こっち；ああ-こう；あんな-こんな.

数詞語幹（語彙的）：（漢字語） いち～いっ，に，さん，し，ご，ろく～ろっ，しち，はち～はっ，きゅう（く），じゅう～じゅっ，ひゃく～ひゃっ，せん，まん［数詞］；（**固有語**）ひい～ひと，ふう～ふた，みい～み，よお～よん，いつ，むう～む，なな，やあ～や，ここの，とお［数詞］；なお「いく-つ」（「いく-

とせ」)，「なん（何）-」(「なん-ねん（何年）」) も疑問数詞と認めるべきである．また「すう（数）-」(「すう-ねん（数年）」)，「れい（零）-」，「ゼロ-」，「はん（半）-」も数詞とするべきである．

［**接尾辞付け**］ひと-つ，ふた-つ，み-っつ，よ-っつ，いつ-つ，む-っつ，なな-つ，や-っつ，ここの-つ；ついたち（一日），ふつ-か，みっ-か，よっ-か，いつ-か，むい-か，なの-か，よう-か，ここの-か，とお-か；ひと-つき（一月），ふた-つき，み-つき；ひと-たば（一束），ふた-たば；ひと-かぶ（一株），ふた-かぶ，さん-かぶ；ひと-こと（一言），ふた-こと，み-こと；ひと-り（一人），ふた-り，さん-にん；いち-くみ（一組），いっ-さつ（一冊）；いっ-かん（一巻）；いっ-たん（一反）；いち-がつ（一月）；いち-ねん（一年）；いち-まい（一枚）；いっ-センチ；いち-グラム；いち-キロ；いち-フィート；ひと-つ-め，ふつ-か-め，ひと-つき-め，ひと-たば-め，いっ-さつ-め，いっ-センチ-め［数詞］；数詞に付く接尾辞は**助数詞**と普通言われる．助数詞から度量衡の単位を特別に区別すべき根拠は言語的には見出せない．

［**接頭辞付け**］第-一，第-百；第-一-冊，第-二-年，第-三-巻［数詞］；第-一-冊-め，第-二-年-め，第-三-巻-め［数詞］；［**複数の接尾辞付け**］三-冊-め-あたり，三-冊-め-ぐらい，三-冊-め-ほど；

［**語幹合成**］［(三-千) - (三-百) - (三-十-三)］-万-（三-千）-（三-百）-三-十-三．

副詞，擬声擬態語語幹（語彙的）［**副詞語幹**］副詞には助詞を接尾し得るものとそうでないもの，特に「・と」を本来持つものとそれを付加してもよいものなどがある．［本来の副詞］もっと，とても，そっと，ふと；さらに（・は）［さら-さら参照］，たまに（・は）［たま-たま参照］；すぐ（・に，・に・は，・に・も）；こう（・は，・も），そう（・は，・も），ああ（・は，・も），どう（・も），きっちり（・と）；［名詞派生］単に（連体詞「単なる」参照），真に（副詞「真の」参照），直接（・に）（連体詞「直接・の」参照）主に（・は）（連体詞「主な」参照），特に（・は）；［形容詞派生］やす-やす・と（安々と），［形容詞名詞派生］どきん・と，しず-しず・と（静々と）；［不明の語幹］そも-そも，おめ-おめ（・と）；［擬声擬態語語幹］ほっ-と，にゅっ・と，ぐん-ぐん（・と），がた-がた（・と）；あれ-ほど（・まで・に），これ-ほど（・まで・に），それ-ほど（・まで・に），どれ-ほど（・まで・に）；［動詞派生］のび-のび（伸び伸び）（・と）［形容名詞］［(のび-のび（伸び伸び）・する）［動詞］参照］，のび-のび（延び延び）（・に / なる）［形容名詞？］；もそ-もそ（・と）［副詞］［(もそっ-と）［形容名詞］参照］，むく-むく（・と）［副詞］［(むくっ-と）［副詞］参照］；えへら-えへら（・と）［副詞］；決して，断じて［副詞］；「一部の副詞＋する，なる形」があり得る：ほっと / する，がくん・と / する［

堂々・と/ する（形容名詞から）参照］；形容詞の副詞形及び繋辞の副詞形を参照（これらを「副詞形」とは呼ばずに「副詞」に入れた方が文法論的によいかもしれない）．

連体詞（語彙的） 本来連体詞という品詞はなかったと思われ，各種の品詞からの寄せ集めである[22]．繋辞の連体形は連体詞に入れるべきではない．

今まで記号「・」の後には付属語が来るものとして扱ってきたのだが，副詞と連体詞に関してこの原則が崩れてしまうのは，この両者の混合的な性格によるものであろう．

名詞語幹（語彙的）：（固有語）の［接頭辞付け］と［語幹合成］の中の［接頭的］及び［接尾辞付け］と［語幹合成］の中の［接尾的］とは紙一重の差に過ぎない．［接頭辞付け］と［接尾辞付け］で「接頭辞」，「接尾辞」とされているものは「接頭辞」，「接尾辞」としての形だけを持っているもの，［接頭的］及び［接尾的］としたものは自立語としての単語の形を持っているという差しかない．したがってこれらはそれぞれ「接頭辞」，「接尾辞」と認めてよい．いずれにせよ，日本語のほとんどの接辞は自立語に由来することになる．しかし漢字語の場合は「接頭辞」，「接尾辞」と［語幹合成］の中の［接頭的］と［接尾的］とを同一視することには問題がある．漢字語において（1+1），{1+(1+1)}，{(1+1)+1} がひとまとまりになる力が強いためである．

以上のうち「-」で結合している総体は1つの単語をなすと言ってよい．問題は「=」による結合部分，すなわち語幹合成である．しかも「=」はほとんど漢字語及びそれと結合する固有語や外来語，それも名詞に限られることが分かる．

ところで先に出した新聞記事に現れた「第｜2-次 / 世界=大戦-後」，「北-朝鮮 / 東部」，「ソ連-領-内 // ナホトカ」，「第｜五-十-三 / 送還=収容所」，「日本-人 / 抑留-者 // 八-百｜六-十-九-人」，「北-朝鮮 // 咸興（ハムフン）-市 // 興南（フンナム）=地区）」はそれらの構造をさらに次のように整理することが出来る，

1) 「（第｜2-次）＋（世界=大戦-後）」，
　「（第｜五-十-三）＋（送還=収容-所）」，
2) 「（北-朝鮮）＋ 東部」，「（ソ連-領-内）＋ ナホトカ」，
　「（北-朝鮮）＋（咸（ハムフン）-市）＋（興南（フンナム）＝ 地区）」，
3) 「（日本-人）＋（抑留-者）＋（八-百｜六-十-九-人）」

1) は修飾的要素と非修飾的要素の結合であるが，2) は全体と部分の関係であろうか，3) は等位的な結合である．記号「=」の後の要素は2音節であるために記号の前後で2つの単語があることになるが，「=地区」は後置詞的である．ここで「第｜」はアクセントの点で独立性が強いが，接頭辞扱いとしてよいだろう（数詞における唯一の接頭辞である）．「北-」は接頭辞，「-次」，「-後」，「-所」「-

領」，「-内」，「-市」，「-人」，「-者」は接尾辞である．漢字2字からなる漢字語が接尾辞のように感じられるものがたまにある．例：社会-主義，資本-主義，マルクス-主義．（世界=大戦-後），（送還=収容-所），（興南（フンナム）＝地区）はそれぞれひとまとまりの単位をなしているが，この単位を「**単語結合**[23]」と呼ぶことにしよう．（送還=収容-所）では「収容所」が後置的要素である．例：捕虜=収容所，ナホトカ=収容所．（世界=大戦）では「世界」が前置的要素，「大戦」が後置的要素とすることもできる．世界=大戦，世界=恐慌，世界=大会；世界=大戦，ヨーロッパ=大戦．前置的，後置的の別は相対的なものでしかない．漢字語は単語のうち前置詞あるいは後置詞の付いたものまで辞書に載ることは一般に少なく，さらに単語結合まで辞書に載せることもあまりない．これらの単語結合の特徴は一切の助詞をここに介在させないことである．また単語結合には固有語や外来語が混ざることもある．水先=案内，日帰り=旅行；野菜=市場，バター=炒め；ダイヤ=改正，テレビ=司会者；大規模=マンション，古代史=セミナー．

以下に日本語の主として漢字語名詞の単語結合における前置的要素と後置的要素の検討を行う．

(6) 名詞的単語結合

2字の漢字からなる漢字語の単位（それに1漢字からなる接頭辞と接尾辞が1個以上付きうる）の結合は，次のように多く結合前後の単位を取り出し，そのうちの頻度の高い前置的要素と後置的要素を検討することにより，日本語に見られるさまざまな単位を明らかにし得る．なお前置的要素と後置的要素を取り出す厳密な基準があるわけではない．

アクセント単位から見た区切り	要素間の論理的な関係
(緊急=輸送)=道路｜沿道=(建築-物)	{[(緊急+輸送)+道路]+沿道}+(建築-物)
(被災-者)=住宅｜建築=資金	{[(被災-者)+住宅]+建築}+資金
再生=可能=エネルギー｜等｜設備=(設置-費)｜補助	/{[(再生+可能)+エネルギー]+等}+[設備+(設置-費)]/+補助

ここではあくまでも言語上の区切り（アクセント単位から見た区切り）から出発する．日本語のアクセント単位とアクセントのパターンの変化については細かな規則が存在するようだが，これには後で触れる．以上のうち「｜」は自立的な単語の境界と言ってよいが，「等」は意味的には自立的とは言いがたく，このように形式と内容の一致しないものが少し存在する（「第｜」参照）．

また名詞的単語結合と名付けたが，上記の例では「可能」は形容名詞であろう．漢字2字からなるいわゆる語幹には接尾辞しか付かないもの，格助詞の付き得ないものも含まれる．例：共産（共産-党，共産-党-員，共産-主義，共産-主義-者）［勿論ここで漢字語の常として「党員」，「主義者」がある程度の独立性を示すこ

とがあるにせよ].

以下拙稿「日本語造語要素」に基づいて例の一部を挙げるが（語彙的要素に限る），多くの例は拙稿を参照されたい（ただしこれも未完のものだから，まだ相当の漏れがある）[24].

前置的要素よりも後置的要素の方が圧倒的に多い.

(A)「**前置的要素**」からは次のものが取り出される.

接頭辞（漢字1字からなる） これには3種類ありそうである.

1) 常にアクセント上の自立性のないもの（記号「-」で示される）：異（異-世代）-，悪-（悪-宣伝），御-（御-遠慮），急-（急-成長），皆-（皆-保険），小-（小-規模），大-（大-日本，大-ブリテン），真-（真-面目），正-（正-会員），再-（再-構築，再-値上げ），最-（最-大手，最-優先），不-（不-許可），無-（無-医師），未-（未-決定），；
2) アクセント上の自立性のない場合（記号「-」で示される）と自立性のある場合（記号「｜」で示される）とがあるもの：第-/｜（第-三，第-九；第｜十，第｜百）；亜-/｜（亜-熱帯；亜｜急性=甲状-腺-炎），古-/｜（古-伊万里；古-ロシア-語，古｜ロシア-語），旧-/｜（旧-正月，旧-ソ連；旧｜陸軍，旧｜古川=庭園），諸-/｜（諸-民族；諸｜国際=機関），新-/｜（新-憲法，新-秩序；新｜千歳=空港），親-/｜（親-中国；親｜北-朝鮮），前-/｜（前-段階；前｜大統領），全-/｜（全-国民；全｜農業=団体），半-/｜（半-泣き，半-地下；半｜永久-的），反-/｜（反-韓国；反｜日米=同盟），非-/｜（非-公式；非｜組み換え-品），準-/｜（準-会員；準｜防災=地域）両-/｜（両-腕，両-目，両-手，両-機関，両-言語；両｜被告，両｜政権）；現-/｜（現-段階，現-政権；現｜駅長），総-/｜（総-攻撃，総-崩れ，総-コレステロール；総｜40-個），本-/｜（本-会議，本-醸造；本｜学会），；
3) 常にアクセント上の自立性があるもの（記号「｜」で示される）：故｜（故｜佐藤=勝巳-氏），今｜（今｜大会），貴｜（貴｜大学），各｜（各｜家庭），祝｜（祝｜入学，祝｜御-入学），純｜（純｜日本，純｜和風），某｜（某｜新聞），満｜（満｜3-年），約｜（約｜半分），駐｜（駐｜日本，駐｜ロシア）.
4) 格助詞を取って連体修飾語としてのみ用いられるもの，及びそこから派生したもの（記号「｜」で示される）：真–の（副詞「真–に」参照）；単–なる（副詞「単–に」参照），当–の，例–の（この最後の例は名詞「例・の」ととらえてはいけない理由は希薄である）.

以上のうち1) は接頭辞とすることに異論はないだろう．3) は明らかに接頭辞とは区別すべきものと思うが，それを自立語と認めるとすると，**連体詞**しかないことになる（事実この種のものを南北朝鮮では連体詞として扱っている）．日本語の語感としては連体詞よりも副詞に近い感じもする．3) のうち「現」，「総」，

「本」はアクセントと区切りにより接頭辞と連体詞の双方がありそうである．3)のその他多くのものは条件による発音上の違いに過ぎない模様であるから，一応接頭辞扱いにしてよいであろう．いずれにせよ日本語における単語と単語の部分との違いの曖昧さを示す例である．

前置的漢字語（漢字2字からなる） 常にアクセント上の自立性がない（記号「=」で示される）：

1) 一括=（一括=処理），著名=（著名=作家），特殊=（特殊=事情），南部=（南部=ロシア），複数=（複数=口座，複数=カメラ，複数-回），臨時=（臨時=総会），専業=（専業=農家）［これらは**名詞的単語結合の構成要素**となる］この類が多数ある；上記の例では「著名=」，「特殊=」が形容名詞語幹である．「臨時」には助詞「・の」と「・に」しか付かないようである（つまりこれを名詞と見るか，あるいは「連体詞」，「副詞」と見るかが問題となる）．「一括」には格助詞は付きそうにないが，これは形容名詞ではなく，漢字語動詞「一括・する」の語幹であろうか？ 連体詞的な漢字語要素がある（一大=（一大=旋風，一大=汚点）），（国際=（国際=関係，国際=フォーラム））．これは**連体詞**に近い．自称=（自称=/｜公務員），通称｜（通称｜奥田），推定｜（推定｜岡田），首都｜（首都｜東京），過去｜（過去｜最低），現金｜（現金｜2-万-円），時価｜（時価｜1-万-円），零下｜（零下｜3-度），摂氏｜（摂氏｜3-度）などは連体詞に非常に近い．
2) 直接（｜）［これは単独で副詞として用いられる］；
3) 比較-的（｜）［副詞］；直接-的（｜）［形容名詞．接尾辞「-的」を持つものは単独で連体修飾語］．

ついでながら動詞性名詞（2字からなる）が新聞などでは単独で（すなわち（｜）述語形（終止形と中止形）として用いられることを参照せよ：「出国=禁止=解除」（解除・する，・した，・して）．

接頭辞（固有語） 本来日本語には接頭辞はなかった．

1) 単語としては単独に用いられないもの：す-（す-うどん），すっ-（素っ-裸）；ま-（真-夜中），まん-（真ん-中），まっ-（真っ-先，真っ-黒，真っ-暗，真っ-平，真っ-盛り）；ぶっ-（ぶっ-ちぎる），ぶん-（ぶん-まわす）；お-（お-うし），おん-（おん-どり）；め-（め-うし），めん-（めん-どり）；じ-（地-鶏）；ど-（ど-根性）；はつ-（初-参り，初-出場）；えせ-（似非-学会）．
2) 形容詞の語根，形容名詞語幹：おお-（大-津波），わる-（悪-知恵，悪-酔い，悪-賢い）；にわか-（俄か-雨，俄か-成金）；
3) 末尾母音 e の a への変化のあるもの：うわ（上）-（うわ-め（上目），うわ-くちびる（上唇））），うわっ-（上っ-面）；
4) それ自体単語として用いられるもの：あお-（青-鬼），うち-（内-孫），く

そ-（くそ-じじい），おす-（雄-猫），めす-（雌-犬），おとこ-（男-親），ばか-（馬鹿-男，馬鹿-正直，馬鹿-高い，馬鹿-受け）．1) ～ 3) は接頭辞として問題ないだろう．4) の場合後続の語幹の頭音が連濁を起こしている時は前置的要素が接頭辞であると認められるが，それ以外は前置的要素の意味をも考慮すれば，ある程度接頭辞としての認定も可能だろう．その他例えば「ひがし-（東-ヨーロッパ），みなみ-（南-ロシア）」，にたもの-（似た者-夫婦，似た者-親子）なども接頭辞（名詞派生）としてよいだろう．また「インチキ-」（形容名詞派生）（インチキ-宗教，インチキ-効果）．

5) 動詞連用形の中には接頭辞と認められるものがある：ためし-（試し-書き，試し-履き）．第2要素の頭音が連濁を起こすこともこれの接頭辞性を明らかにしている．見切り-（見切り-発車，見切り-建築）．

前置的固有語　体言の前にのみ用いられる不変化詞

1) 代形容詞的な不変化詞（｜）：あの，この，その，どの；かの（本来これらの「の」は格助詞だっただろう）．（**連体詞**：本来これは日本語になかったと思われる）

2) 代形容詞的その他の不変化詞（動詞派生）（｜）：さる，ある（或る），あらゆる，いかなる，とんだ，いわゆる（所謂），なかんづく（就中）等々．

さらに体言の前にのみ用いられるさまざまな形式の単語（これらはすでに1単語の枠を超え，いわば**分析的な形の連体詞**と呼ぶべきものである）（｜）：a) ああ / いう，こう / いう，そう / いう，どう / いう；ああ / いっ-た，こう / いっ-た，そう / いっ-た，どう / いっ-た；b) あれ-しき-の，これ-しき-の，それ-しき-の，どれ-しき-の；あれ-ほど・の，これ-ほど・の，それ-ほど・の，どれ-ほど・の［副詞形：あれ-ほど，これ-ほど，それ-ほど，どれ-ほど参考］；ありとあらゆる，まことしやか・な［副詞：まことしやか・に］，けしからん［・の，・のに，・ので参照］．

3) 地名で用いられる前置的名詞（｜）：あざ｜（字｜上岡），おおあざ｜（大字｜上岡）．これらは連体詞と呼ぶわけにはいかないだろう．

4) 数詞の前にあらわれるもの（｜）：きっかり｜（きっかり｜3-時），およそ｜（およそ｜3-時間），ほぼ｜（ほぼ｜3-年），まる｜（まる｜3-年）これらは「約｜（約｜1-時）」に似て，**副詞的**なものである．ただし次の用いられ方を参照せよ：「3 時｜きっかり（・に）」，「…・に / ほぼ / 当たる」．ほかに次のもの参照：ちょうど｜3 時，3 時｜ちょうど（・に）；ぴったり｜3 時，3 時｜ぴったり（・に）．

5) 「すべて」，「それぞれ」，「おのおの」，「みな，みんな」は本来名詞であろうが，名詞の前に単独でも用いられるし（副詞的），名詞の後にも用いられる（またこれらは格助詞「・の」を伴って連体詞的にも用いられる）（｜）：

すべて｜学生（・が），学生｜すべて（・が），学生・が / すべて，すべて・の / 学生（・が）．また次のものと比較せよ：学生・が / 多数，多数・の / 学生・が；3-人・の / 学生，学生・が /3-人．「うわさ・の」（噂・の / 学生）は名詞「うわさ」の形とすべきではないか？

6) 次のものは名詞的単語結合に入り込んだと見られるものである．名詞派生：しんがた=（新型=爆弾，新型=インフルエンザ），じもと=（地元=自治-体）；動詞連用形派生：受け入れ=（受け入れ=大学），こしぬけ=（腰抜け=県会=議員）．

前置的外来語　外来語は本来名詞しかないと思われる．動作性名詞は「・する」を伴って分離動詞を作り得る（「カンニング・する」，「コンタクト・する」）．またこれらは，漢字語の動作性名詞と似て，それ自体の形が述語形（終止形，連用形）としても用いられる．単なる名詞と形容名詞とでは形が異なるところが興味深い．例：名詞「システム」，形容名詞「システマティック」．

1) ［**接頭辞，接頭辞的**］エコ-（エコ-たわし，エコ-カー），エロ-（エロ-映画，エロ-じじい），オール（オール-日本，オール-ジャパン，オール-巨人），テレビ-（テレビ-映画，テレビ-番組），トップ-（トップ-会談），プロ-（プロ-意識，プロ-ゴルフ），フル-（フル操-業），ミニ-（ミニ-政党），ベテラン-（ベテラン-歌手）．これらは後置的要素との関係が「-」であるか「=」であるかが曖昧である．

2) 「ミリ」，「デシ」，「センチ」，「デカ」，「ヘクト」，「キロ」等は日本語としては接頭辞扱いする必要はないと思われる．「ナンバーワン」，「ナンバーツー」等も日本語としては分解できない．

3) 「プラス」（｜），「マイナス」（｜）は数詞の前にある場合は**連体詞的**と言うべきか？　あるいは（=）か？（マイナス｜5-度，マイナス=5-度）

(B)「**後置的要素**」からは次のものが取り出される．

接尾辞（漢字1字からなる）（アクセント上の自立性なし）

1) ［**接尾辞**］-愛（郷土-愛），-案（予算-案），-委（検討-委），-運（女-運，会社-運），-園（動物-園），-王（ブータン-王），-音（摩擦-音，漢字-音），-駅（下車-駅），；［固有名詞＋］−庵（幻住−庵），−駅（東京−駅，プラハ−駅），−一（日本−一），−展（美術−展，飯野=佳代子−展，川端=龍子=名作−展，「日本・の / 美・を / 探る」−展［最後の例では「展」は名詞的；「すぐ / やる / 課」参照；「課」は接尾辞もあるが，名詞もある］），−婚（略奪−婚，できちゃった−婚）．

2) ［**助数詞**］-案（一-案，第｜一-案），-位（一-位，第｜一-位）；-軒（一-軒），-瓶（一-瓶），-分（一-分）．

後置的漢字語（漢字1字からなる）（前置的要素との間で切れる）

1) ［数詞｜］増（40-%｜増），減（50-人｜減），超（10-メートル｜超），強（200個｜強），弱（1-万-円｜弱）［-増（40-%-増），-減（50-人-減）参照］．［名詞｜］｜可（通院｜可）；これらは接尾辞とするべきか? あるいは名詞とするべきか?
2) ［名詞｜］［接尾辞的］｜等（ヴェトナム｜タイ｜等）．
3) ［名詞｜］［後置的名詞］｜著（河野｜著），｜編（河野｜編），｜発（東京｜発），｜着（東京｜着）．
4) ［名詞｜］［**接続詞**］｜兼（学者｜兼｜作家），｜対（日本｜対｜アメリカ），｜即（色｜即｜空）．

後置的漢字語（漢字2字からなる）

1) ［接尾辞的］=案内（職業=案内），=遺産（文化=遺産），=違反（協定=違反），=王国（ネパール=王国），［以上名詞］．
2) ［単独では用いられない．接尾辞に近い］=以外（日本=以外），=以来（明治=以来），=以東（インド=以東），= /｜以下（水準=以下，日本｜以下），｜等々（アジア｜アフリカ｜等々）．
3) ［連濁するもの．接尾辞的］-がいしゃ（会社）（株式-会社），-ざんまい（三昧）（贅沢-三昧），-がっせん（猿-蟹-合戦），-じそ（青-紫蘇），-ぶそく（睡眠-不足）．
4) ［連濁しないが，接尾辞に近いもの］-主義（共産-主義）．
5) ［助数詞］=安打（一=安打），=往復（一=往復），=時間（一=時間）．
6) ［前の単語とは切れる感じがするもの1］｜一同（われわれ｜一同），｜一般（ヨーロッパ｜一般（言語-学｜一般），｜云々（事件｜云々），｜各地（日本｜各地），｜各国（中央=アジア｜各国），｜河口（隅田-川｜河口），｜共通（世界｜共通），｜屈指（国内｜屈指），｜最初（日本｜最初），｜最強（世界｜最強），｜東部（インド｜東部），｜全員（5-人｜全員），｜全県（千葉｜全県），｜前後（50-万｜前後），｜寸前（餓死｜寸前），｜全部（家族｜全部），｜前半（90-年代｜前半），｜相互（アジア｜相互），｜同様（日本｜同様），｜独特（日本｜独特），｜特有（日本人｜特有），｜本来（仏教｜本来），｜平均（年｜平均），｜末期（癌｜末期），｜無用（問答｜無用），｜満々（闘志｜満々）．
7) ［前の単語とは切れる感じがするもの2］｜不可（掲載｜不可），｜可能（熟慮=可能），｜不能（再起｜不能），｜作成（辞書｜作成），｜賛成（遷都｜賛成），｜反対（審議｜反対），｜指揮（近衛｜指揮），｜司会（田原｜司会），｜必着（三月｜必着）．
8) ［**後置的名詞**］｜自身（わたくし｜自身），｜自体（それ｜自体，これ｜自体），｜それ｜自身（民主-主義｜それ｜自身），｜それ｜自体（民主-主義

｜それ｜自体).

9) ［**接続詞**］｜乃至（金｜乃至｜銀）［「｜乃至・は」参照］.

後置的漢字語（漢字 2 字＋漢字 1 字からなる）

1) =委員-会（教育=委員-会，河野=委員-会），=/｜委員-長（選考=委員-長，河野｜委員-長），｜一代記（アレキサンダー=大王｜一代記），=運転-手（お-抱え=運転-手），=可能-性（接触=可能-性），=共和-国（ウズベキスタン=共和-国）.

2) ｜指導-部（イラン｜指導-部）.

接尾辞（固有語）

1) ［現代語では名詞とのつながりが感じられない本来の接尾辞］［数詞，助数詞-］-ぶり（3-年-ぶり，3-か月-ぶり，3 日-ぶり，3-時間-ぶり），-など（欧米-など）.

2) ［連濁を起こしたもの：接尾辞］［名詞，形容名詞-］-がた（父-方），-がた（ピラミッド-型，うるさ-型，静か-型），-がわ（向こう-側），-ぐさ（箒-草），-ぐみ（徹夜-組），-ごころ（絵-心），-じゃみせん（津軽-三味線），-じる（納豆-汁），-じるし（バツ-印），-ずし（ちらし-寿司），-ぜき（双葉山-関），-だけ（乗鞍-岳），-だま（ガラス-玉），-どうふ（ゴマ-豆腐），-ばたけ（外交-畑），-び（誕生-日），-びいき（日本-びいき），-ぶくろ（買い物-袋），-ぶろ（牛乳-風呂）.

3) ［連濁を起こしたもの：接尾辞］［数詞-］-がけ（二-掛け）.

4) ［連濁を起こしたもの：接尾辞］［動作派生名詞-］-買い（ドル-買い），-がらみ（汚職-がらみ），-がり（キノコ-狩り），-がわり（夕食-代わり），-ぎ（仕事-着），-じこみ（にわか-仕込み），-ずみ（使用-済み），-ぜめ（ごちそう-攻め），-ぞい（道路-沿い），-ぞめ（藍-染），-ぞろい（つわもの-ぞろい），-づき（カッコ-付き），-づくり（基礎-作り），-づけ（アルコール-漬け），-づけ（元気-づけ），-づとめ（会社-勤め），-どまり（一兵卒-どまり），-ばなれ（親-離れ），-ばやり（喧嘩-ばやり），-びたし（水-浸し），-びたり（酒-浸り），-ぶり（腐敗-ぶり，悪辣-ぶり），-べらし（人-減らし），-まじり（鼻歌-交じり）．これらのうちいくつかは（「-ぞい」，「-ぶり」）などは 1）に属するかもしれない.

5) ［連濁を起こさないもの：接尾辞］［名詞，形容名詞-］-こ（そば-粉），-さん（子供-さん，岡-さん），-さま（岡-様），-ことば（女-言葉），-ごみ（天然-塵），-すじ（政府-筋），-そば（焼き-そば），-ともだち（喧嘩-友達，飲み-友達），-なべ（ちゃんこ-鍋），-はば（道路-幅），-みそ（白-味噌），むすこ（一人息子），-むすめ（日本-娘），-むら（選手-村），-やど（温泉-宿）.

6) ［連濁を起こさないもの：助数詞］［数詞-］-わ（一-羽），-わり（一-割），-か-げつ（三-か-月），-くち（一-口），-くみ（三-組），-たば（四-束），-たま（一-玉）；

7) ［連濁を起こさないもの：接尾辞］［動作派生名詞-］-あたり（時間-当たり），-あまり（3-年-余り），-かぎり（今日-限り），-さわぎ（どんちゃん-騒ぎ），-そだち（大島-育ち），-たたき（日本-たたき），-ちがい（記憶-違い），-つき（食事-つき），-ぬき（主人-ぬき），-はずし（仲間-外し），-まがい（詐欺-まがい），-まいり（お宮-参り），-まかせ（他人-任せ），-むき（子供-向き），-むけ（日本-向け），-むきだし（感情-むき出し），-まるだし（憎悪-丸出し），-もうで（伊勢-詣で），-ゆずり（親-譲り），-よばわり（売国奴-呼ばわり），-より（日本-寄り），-しらず（怖いもの-知らず，恥-知らず）．ここには動詞的な意味の希薄なものから濃いものまでさまざまである．これらのうち一部のものは（「-あたり」，「-あまり」，「-かぎり」，「-より」）1）に近い．

後置的固有語

1) ［**名詞**］［連濁を起こしたもの］=ごや（芝居=小屋），=じあい（親善=試合）．

2) ［**名詞**］［連濁を起こさないもの］=あいて（交際=相手），=あかじ（財政=赤字），=いちば（野菜=市場），=くみあい（労働=組合），=つなみ（チリ=津波），=どろぼう（税金=泥棒），=どんぶり（親子=どんぶり），=べんとう（日の丸=弁当），=めあて（賞金=目当て），=やしき（お化け=屋敷），=ものがたり（平家=物語），=わりびき（学生=割引）．

3) ［**接尾辞的**］-まぎわ（帰り-間際，終車-間際），-いっぱい（今月-いっぱい）．

4) ［**後置的名詞**］｜そのた（学生｜その他），｜その｜もの（民主-主義｜その｜もの）．

5) ［**後置的形容名詞**］｜いっぱい（元気｜いっぱい，広場｜いっぱい）（・の，・に），｜ゆたか（表情｜豊か）（・な，・に），｜たっぷり（養分｜たっぷり）（・な，・に），｜その・まま（中世｜その・まま）（・の，・に）．

6) ［**後置詞的述語**］｜あり（自信｜あり），｜なし（自信｜なし）［なし・に，なし・で（以上連用的），なし・の（連体形）参照］，｜ありき（言葉｜ありき）；｜あり-げ（自信｜あり-げ），｜な-げ（自信｜な-げ）［以上形容名詞］，｜すれすれ（領海｜すれすれ），｜そっくり（あいつ｜そっくり），｜このうえない（危険｜この上ない），｜ない（際限｜ない）．

7) ［**後置的連体詞**］｜なき（国境｜なき / 医師-団），｜ゆかり・の（ドストエフスキー｜ゆかり・の / 家），｜きって・の（町内｜きって・の）．

8) ［**後置的副詞**］｜ともども（加藤-さん｜ともども）［連体形「｜ともども・

の」], ｜ともに（福島-県｜ともに），｜もろとも（家族｜もろとも）[連体形「｜もろとも・の」], ｜よろしく（悲劇・の / ヒロイン｜よろしく），｜さながら（地獄｜さながら）[連体形「地獄｜さながら・の」], ｜問わず（国籍｜問わず），｜はじめ（わたくし｜始め），｜そっちのけ（われわれ｜そっちのけ）[・で，・の],

9) ［**接続詞**］｜あるいは（本｜あるいは｜雑誌），｜および（アジア｜及び｜ヨーロッパ），｜そして（日本｜そして｜ロシア），｜それから（日本｜それから｜ロシア），｜おなじく（A｜同じく｜B），｜もとい（安田｜もとい｜岡田=中尉），｜つまり（父・の / 弟｜つまり｜叔父）｜また（山｜また｜山），｜または（本｜または｜雑誌），｜ならびに（A｜並びに｜B），｜すなわち（甲斐｜すなわち｜山梨），｜こと（高木=正雄｜こと｜朴=正熙），［以上名詞を結ぶ］；｜かつ［形式名詞を結ぶ］（必要｜かつ｜充分），［動詞連用形］（飲み｜かつ｜食う）；

10) ｜ゆえ（戦争｜故）[「戦争｜ゆえ・に，ゆえ・の」参照，「戦争・の｜ゆえ・に，ゆえ・の」参照].

後置的外来語

1) ［接尾辞的］ -カップ（優勝-カップ），-カルテル（企業-カルテル），-ケーキ（-ケーキ），-サービス（-サービス），-シーズン（-シーズン），-ジュース（ジュース），-パワー（-パワー），-ホテル（-ホテル）.

2) ［**助数詞**］-アール，-インチ，-カラット，-ガロン，-キロ，-グラム，-シーズン，-ノット，-パーセント，-ポイント.

3) ［前置的要素との間に切れ目がある］｜アナ，｜アナウンサー（岡｜アナ，岡｜アナウンサー），｜コンサルタント（経営｜コンサルタント），｜ディレクター（岡｜ディレクター），｜エクスプレス（オリエント｜エクスプレス）.

4) ［**接続詞**］｜イコール（薩摩｜イコール｜攘夷-派）.

以上の名詞的単語結合のうち根幹をなすのは「2 字漢字語＋2 字漢字語」で，新聞や論文形式のもので圧倒的多数はこれに属する.

以上のうち接頭辞付け，接尾辞付けによる合成語でさえすべてが辞書に登録されているわけではなく，まして接頭辞的なもの，接尾辞的なものによる単語結合及び語幹合成による単語結合（「2 字漢字語＋2 字漢字語」その他）は百科事典的な辞典，術語辞典などに譲るとしても，接頭辞的なもの，接尾辞的なものの語彙的な特徴は辞書になんら触れられてもいないのが普通である.

(7) 分析的な形再論

ところで (6) で名づけた「名詞的単語結合」について述べなければならない．本来名詞的単語結合その他は次のようなものである．

規定的（修飾的，従位的）単語結合

名詞的単語結合	大きい / 家，静か・な / 環境，飛ぶ / 鳥，きっかり / 3 時
形容詞的単語結合	とても / 大きい，極度・に / 小さい，比較的 / 多い
形容名詞的単語結合	とても / 静か，比較的 / 静か，この上なく / 堂々・と / して / いる
副詞的単語結合	とても / 大きく，とても / 静か・に，常に / 美しく
動詞的単語結合	たくさん / 歩く，高く / 飛ぶ，今日 / 行く，遠く・から / 来る，本・を / 読む，親・に / 頼る，水・で / 出来る，空気・から / なる，歩きながら / 考える
陳述的単語結合	雨・が / 降る，子供・が / 読む
等位的単語結合	山・と / 川，山・か / 川，山 / 及び / 川，山 / あるいは / 川；大胆 /かつ / 不敵，大胆・で/ 慎重，大胆・だ・が / 慎重；高く / 長い，高い・が / 長い，読み / かつ / 書く

(6) で名づけた「名詞的単語結合」が上記の本来の名詞的単語結合と異なるのは，それが漢字語からなること，すなわち助詞なしの結合だということにある．例：「情報=理論」（「場・の / 理論」参照），「積極-的=参加」（「積極-的・な / 参加」参照）．

多くの言語で日本語型の名詞的単語結合は存在しない．ロシア語では **железная гвоздь / zheleznaja gvozd'** 鉄釘（鉄の釘）も **железная дорога / zheleznaja doroga** 鉄道（鉄の道）も「形容詞＋名詞」という構造は同じだが，**железная дорога**（鉄道）は「硬い単語結合」と呼ばれ，1 つの概念を表すものである．**железная гвоздь** はそれ自体はまさに「鉄・の / 釘」なのだが，日本語で合成語（名詞-名詞「鉄-釘」）が生じたものである．多くの言語でこの構造がロシア語と似ているが，英語には若干日本語に似たものがある．例：information theory（情報理論），field theory（場の理論）．ドイツ語には「名詞-名詞」という合成語があり，日本語と似る．例：Eisen-bahn（鉄道），Informazions-theorie（情報理論）［後者は第 1 要素末尾に s を伴う］．日本語の「鉄道」型の合成語は漢語も似ている．「铁路」は合成語の構造も日本語の「鉄道」と似ていて，それは決して「鉄の道」ではなく，漢語ではこのような「名詞＋名詞」の構造は文章語的という特徴を持つ．「東京大学図書館」と「東京大学の / 図書館」とを比較せよ（漢語でも「东京大学图书馆」と「东京大学的 / 图书馆」の違いがある．前者が書き言葉的，後者が

話し言葉的)．日本語の「鉄道」に似た構造をモンゴル語に多く見る（**төмөр зам / tömör zam** 鉄＋道＞鉄道)．似た構造はトルコ語にも見られるが（**demir yol-u** 鉄＋道（その)），3 人称属格接尾辞の添加により「名詞＋名詞」の結合の硬さが示される．トルコ語では「形容詞＋名詞」の構造ではその接尾辞は添加されない．モンゴル語では「名詞＋名詞」以外にも硬い単語結合は豊富で（例：**бага сургууль / baga surguul'**（小さい / 学校＞小学校)，**дунд сургууль / dund surguul'**（真ん中の / 学校＞中学校)，**их сургууль / ix surguul'**（大きい / 学校＞大学)，これらは辞書に載せられる．

それでは日本語の「名詞的単語結合」はモンゴル語の「名詞＋名詞」(**төмөр зам** 鉄道）と構造が同じか？ 以下の表を参照．特に太字部分参照．

日本語	ドイツ語	英語	モンゴル語	ロシア語
鉄道	Eisen-bahn	railway	**төмөр зам**	**железная дорога**
漢字語（1 字＋1 字）	合成語		単語結合	
			名詞＋名詞	形容詞＋名詞
情報=理論	Informazions-theorie	information theory	**мэдээллийн онол**	**имформационная теория**
漢字語（2 字＋2 字）	合成語	単語結合		
		名詞＋名詞	名詞（属格）＋名詞	形容詞＋名詞
大学	Universität	university	**их сургууль**	**университет**
漢字語（1 字＋1 字）	単純語		単語結合（形容詞＋名詞）	単純語

日本語の「2 字漢字＋2 字漢字」は構造の点では単語結合（名詞＋名詞）よりは合成語に近い，すなわち単語結合（名詞＋名詞）と合成語の間に位置すると言える．これは漢字語の特殊性によると言える．「1 字漢字＋1 字漢字」は日本語の固有語（単純語）や他言語の単純語よりも合成語に近い．モンゴル語の単語結合には日本の漢字語との構造上の類似はない．

まず品詞と総合的な形との関係を表で示す．

	格	連体形	接続形		述語形			
			副詞	仮定	中止	終止	命令	勧誘
名詞	○	・の	×	・なら	・で*	・だ	×	×
形容名詞		・な，・の	・に*，・					

<table>
<tr><td></td><td></td><td rowspan="2">×</td><td></td><td rowspan="2">と*</td><td></td><td></td><td></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">形容詞</td><td>-い</td><td>-く*</td><td>-けれ-ば</td><td>-く*</td><td>-い</td></tr>
<tr><td colspan="2">動詞</td><td></td><td>-u</td><td>×</td><td>-e-ba</td><td>-i</td><td>-u</td><td>-e</td><td>-oo</td></tr>
<tr><td rowspan="2">助詞</td><td>①</td><td colspan="2">×</td><td rowspan="2"></td><td colspan="2">接続助詞</td><td colspan="3">終助詞</td></tr>
<tr><td>②</td><td colspan="2">格助詞*</td><td colspan="2">×</td><td>並立助詞</td><td colspan="3">×</td></tr>
</table>

* 副助詞が接尾し得る.

① 形容名詞，形容詞，動詞にのみ接尾し得る.

② 名詞にのみ接尾し得る.

○は存在するもの，×は存在しないもの.

名詞と形容名詞の変化形のうち，「・の」を除き，すべて「繋辞」に属する.

形容名詞（繋辞），形容詞，動詞の連体形＋「・の」，「 / こと」による名詞形が存する

次に総合的な形の延長線上にある分析的な形を，すでに示したものをも含めて，以下に示す.

分析的な形

（A） 自立語相当

分析的名詞：自信｜なし，言葉｜ありき，学生｜その他，民主-主義｜そのもの，

分析的形容名詞：元気｜いっぱい（・の，・に），表情｜豊か（・な，・に），養分｜たっぷり）（・な，・に），中世｜その・まま（・の，・に），自信｜あり-げ（・な，・に），自信｜な-げ（・な，・に），あいつ｜そっくり（・な，・に），領海｜すれすれ（・の，・に）

分析的形容詞：分離形容詞；ほかに「危険｜この上ない」，「際限｜ない」.

分析的動詞：分離動詞，敬語動詞．英語の get up, go up, go down, look after, get to, put up with 等も分離動詞に属する.

分析的連体詞：ああ / いう，あれ-しき・の，あれ-ほど・の，さ-ほど・の，国境｜なき / 医師-団，ドストエフスキー｜ゆかり・の / 家，町内｜きって・の，加藤-さん｜ともども・の，家族｜もろとも・の，地獄｜さながら・の，われわれ｜そっちのけ・の.

分析的副詞：あれ-ほど，さ-ほど，自信｜なし・に（なし・で），加藤-さん｜ともども，福島-県｜ともに，家族｜もろとも，悲劇・の / ヒロイン｜よろしく，地獄｜さながら，国籍｜問わず，わたくし｜始め，われわれ｜そっちのけ・

で.

英語などではさらにつぎのようなものもある：**分析的接続詞**（as well as, as far as, as if 他），**分析的間投詞**（God damn 等），**分析的前置詞**（in front of, for the sake of, next to 等）.

（B） 付属語相当

1) 助詞相当

格助詞相当（* は連体形，その他は連用形）：・に / 於いて，・に / 於ける*，・に / 応じて，・に / 関し（関して），・に / 関する*，・に / 比べ（比べて），・に / 際し（際して），・に / 沿って，・に / 対し（対して），・に / 対する*，・に / ついて，・に / ついて・の*，・に / つれて，・に / 引き換え，・に / 比し（比して），・に / 基づいて（基づいて），・に / より（よって），・の / おかげ・で，・の / くせ・に，・の / 如く（・に），・の / 如く・の*，・の / こと・で，・の / 際・に，・の / せい・で，・の / ため（・に），・の / ため・の*，・と / ともに，・と / いっしょ・に，・で / もって，・から / して，・を / して，・を / 問わず，・を / 始め，・を / 除き（除いて），・を / 除く，・を / ぬき．格助詞に接尾するこれらの動詞派生の一群の単語を「**後置詞**」と呼ぶ人がいるが，その必要はないと思われる．分析的な形は，機能こそは語尾的であるが，自立語との結合において成立するものであるから，それらの自立語に特別な命名は必要ない．ただ現代語における「おいて」，「おける」という形（動詞「於く」に由来するが，ほとんどその記憶がない）だけが「後置詞」を設定する根拠を与える．後置詞と動詞の区別の曖昧なものも多い．

並立助詞相当：・のみ・ならず，・は | おろか，・は | さておき，・は | ともあれ，・は | 勿論，・も | さることながら，・だけ・で / なく．

2) 語尾相当

述語形相当（原則として終止形，接続形，連体形のすべての形を持ち得る）：［名詞，形容名詞語幹，変化詞連体形＋］・に / 過ぎない，・に / 違いない，・に / 間違いない；［名詞＋］・の / 如く（・だ）；［変化詞終止形＋］・から（・だ），［形容詞，繋辞中止形＋］-て / たまら-ない，-て / どうしようもない，-て / ならない，-て・は / ならない，-て・も / よい；［変化詞仮定形＋］ / よい，/ だめ（・だ）；［変化形否定仮定形］/ ならない，/ だめ（・だ）；［変化詞連体形＋］・だけ（・だ），/ もの（・だ），・の・だ，/ はず（・だ），・よう・に / なる，・よう・に / する，/ こと・だ，/ こと・に / なる，/ こと・に / する；［動詞現在連体形＋］/ 最中（・だ），/ 途中（・だ），/ 必要・が / ある，・べき（・だ），・べき・で / ない，・に / 限る，・に / 尽きる，・しか / ない，/ ほか（・に） / ない，/ こと・が / 出来る；［変化詞中止形＋］/ すむ，/ すまない；［動詞中止形＋］/ いる，/ ある，/ やる，/ くれる，/ もらう，/ みる，

/ おく，/ しまう，/ いく，/ くる［「-て（-で） / いる」，「-て（-で） / しまう」は話し言葉で「-てる（-でる），「-ちまう（-ぢまう）」～「-ちゃう（-ぢゃう）」となることがある］.

接続形相当（して，すれ-ば，する・と，する・から，する・ので，する・のに，する・が，する・けれども，する・し）：［変化詞連体形＋］・まで・に，・だけ・で / なく，/ 限り，/ 限り・に / おいて，/ 故・に，/ くせ・に，/ 手前，/ ため（・に），/ おかげ・で，/ くせ（・に），/ せい・で；［変化詞終止形＋］・と / 思ったら，・から・に・は；［動詞現在連体形＋］/ 最中・に，/ 途中・で，-やいなや，・が / 早いか，・と / すぐ・に，・に / つれて；［動詞過去連体形＋］/ 余り，/ 途端，/ 日・に・は.

連体形相当：［変化詞連体形＋］/ 限り・に / おいて・の（おける），/ 故・の；［動詞現在連体形＋］/ 最中・の，/ 途中・の；［形容名詞］・と / した.

終止形相当：［変化詞終止形＋］-って；［形容名詞］・と / して / いる.

このように日本語は特に付属語相当の分析的な形が，漢字語型の単語結合とともに，よく発達していることが知られる．特に語尾相当の分析的な形がロシア語，ドイツ語，英語等のヨーロッパ語にはほとんど見られないことを参照せよ．またロシア語やドイツ語のような屈折性の強い言語は自立語の分析的な形もほとんど許さない．英語は分析的な形が比較的多い．なお分析的な形が単語結合とは異なることに注意する必要がある．

まだ漏れはあると思われるが，出来る限り集めた材料により列挙した日本語の文法的な単位が以上の如くである．造語論を含めて，日本語のより完全な形態論を構築する必要性を感じる．

(8) 朝鮮語との比較

朝鮮語の単語の構造と文法的な単位は多くの場合日本語とよく似ている．

文を区切る単位としての「文節」はおよそどの言語にも認められるものであるが（これは従来シンタグマ，音声的単語，その他の呼称がある），日本語と朝鮮語ほど明確なものは少ない．恐らくそれは接頭辞を欠き，接尾的に諸要素を後置させて語彙的，文法的拡大を図って来た膠着語の到着点でもある．屈折性の高い言語ほど文節と単語の境界が一致することが多い．

日本語で文節を含む呼気段落に関与する要素としてアクセントがあるが，アクセントがなくなった現代ソウル方言では中期朝鮮語のアクセントの変形としての長母音もなくなりつつあるので，そのような要素も存在しないと言ってよい．

自立語と付属語の区分も日本語と似ている．付属語は不変化詞としての助詞

と変化詞としての繫辞に分かれる．繫辞は総合的な形の肯定形 -이다 <だ> と分析的な形の否定形 -가 아니다 <でない> がある．

自立語の変化詞には動詞と形容詞があるが，これらは基本的には活用が同じであるから（なお繫辞も基本的に活用がこれらと同じである），一時的には用言という品詞が取り出されるが，これに繫辞をも含めるのが便利である．日本語の不規則動詞は「する」と「来る」しかないと言えるが，朝鮮語には変格用言というものが何種類もあり，複雑である．

用言の語幹が現代朝鮮語で3種類の語基を区別することも日本語の場合と似ている．ただし語基の成立の事情が日本語と朝鮮語では異なった可能性がある．用言の接尾辞も語尾もどの語基に接続するかがあらかじめ決まっているのも日本語と同じである．

日本語の形容動詞に似たものはわずかに「-적（的）」という接尾辞を持つ漢字語その他一部に限られる．形容詞と動詞の別は一部の変化形での差異だけである（繫辞は形容詞に近い）．日本語と似て「名詞＋하다（する）」という分離動詞がある．日本語の多くの漢字語形容名詞に対応するものはやはり「名詞＋하다（する）」であるが，これは分離形容詞と呼ぶべきものである．分離用言とでも呼ぶべきものは朝鮮語では日本語以上に多いが，辞書での記述は厳密ではない．一部の用言は動詞としても形容詞としても用いられるものがある．

固有語，漢字語，外来語という3つの語層が音韻的特徴から取り出されるのも日本語と似ている．日本語の連濁に似たリエーゾンという現象（形態素の間に子音nが挿入される）や濃音化（後置的要素の頭音（平音）が濃音化する）が存在するが，そのあり方が語層により微妙に異なる．

朝鮮語は本来名詞も用言も語根と語基形成母音との間に子音の複雑な形態音素論的交替が見られたが，近年名詞のそれは単純化しつつある．この現象はますます名詞に接尾する語尾が助詞に変化する契機を与えた．助詞は多く母音に付く形と子音に付く形を分化させた．日本語はこの点甚だしく単純である．なお名詞に付く助詞は現代朝鮮語においても日本語の助詞よりも前接する名詞との結合度がずっと語尾に近いと言える．ついでながら名詞は語尾ゼロあるいは助詞の付かない形があるが，動詞は必ず語尾を要求する点が他のアルタイ諸言語とは異なる（アルタイ諸言語では動詞の語幹そのものは命令形となるという共通点がある）．

用言は終止形，接続形（副動詞形），連体形（形動詞形），名詞形がある．日本語は連体形が，繫辞を除いて，終止形に合流したが，朝鮮語は連体形が何種類も存在し，しかも終止形との対応が明瞭でないところも他のアルタイ諸語に似ている．ただしアルタイ諸語とは異なり，連体形が終止形としても用いられることはない．日本語その他のアルタイ諸語も連体形がいわば名詞形（動名詞形）とし

ても用いられてきたが（現代日本語は「変化詞連体形＋名詞」という分析的な形が多く用いられる），朝鮮語だけが名詞形（動名詞形），しかも3種類を持っている（現代語では分析的な形も用いられる）．日本語の終助詞や接続助詞のようなものは朝鮮語にはなく，量的に多い終止形と接続形（副動詞形）それ自体が日本語の終助詞や接続助詞などの機能をも持つ．日本語の変化詞の中止形は朝鮮語用言のいわゆる連用形と似ていて，それ単独で文法的機能（日本語の中止形と似る）を持ち得る．

用言の文法範疇は日本語とはかなり異なる．朝鮮語の用言の活用はかなり体系的で，文法範疇と形式の不一致の目立つ日本語の活用とは異なる．否定形は本来否定副詞によるものだったのが，「名詞形＋否定副詞＋する」すなわち「することしない」という形が多く用いられる（これに2種類ある）．用言の敬語は謙譲があまり発達しておらず，尊敬は接尾辞であらわす．日本語の丁寧-非丁寧に当たるものは4〜6段階あり，かなり複雑である．本来テンスはなく，アスペクト的な体系だったと思われるが，現代語はテンスを基調とするとはいえ，アスペクトとの複雑な関連もあると思われる．朝鮮語は直説法のほかに目撃法（回想法）の体系を持ち，ほかに命令法，勧誘法，意思法などがある．現代日本語はヴォイス（受け身と使役）に関して極めて整然としているが，朝鮮語はヴォイスと自他動性との別が曖昧であり，文法範疇としてヴォイスが成立つかどうかが曖昧である．

用言の文法的な分析的な形は多く，「連用形＋動詞」からなる構造が多いことも日本語と似る．それらのうち日本語の「して / いる」，「して / ある」に相当する形の研究が最も進んでいるが，日本語とは微妙に異なる．

格助詞と副助詞は極めて多い．格の体系はかなり複雑で，同じ機能を持つ複数の形が存在し，微妙な意味の違いを持つ．さらに分析的な格相当の形も豊富である．

本来接頭辞を持たなかったと思われる朝鮮語に接頭辞，連体詞などが生じたのも日本語と似る．朝鮮語は中期朝鮮語の段階でもすでに形容詞と動詞が活用の点で同じ用言を構成したと思われるが，形態論を詳しく観察する時は，さらに古い段階で形容詞が名詞と似ていた痕跡を求め得る．つまり日本語や他のアルタイ諸語と同じく形容詞=名詞（つまりNomen）だったという点で印欧語とも共通する[25]．

造語（単語形成）と形態形成の分野で朝鮮語にのみ見出せる特質として，用言の語幹（語基ではなく）があたかも名詞語幹のように他の名詞や動詞に前置し得たという特質を挙げることが出来る．この特質は日本語は勿論アルタイ諸語にも普通見られないものである．

朝鮮語自体の文法単位のいっそう綿密な研究が望まれる．

【注】

1 ついでながらわが日本語には言語学的な意味での「句読法」の規定が皆無と言ってよい．例えば言語学に無智な出版界の慣用から始まったと思われる『』と『』の間に読点を置かない習慣とか「、(あるいは,)」と「・」との明確な違いの指摘の欠如等憂慮すべきものがある．

2 この単位はアクセントのようなかぶせ音素をも含むから音韻論的なものである．第一次的に「呼気段落」が取り出された後に「音節」などの単位が取り出し得るというべきである．

3 屈折語では，多くの場合，呼気段落と単語とが一致する．しかし普通前置詞は次の単語（多く名詞や代名詞，数詞，そして形容詞）と共に一つの呼気段落をなす．冠詞のある言語では「冠詞＋名詞」あるいは「冠詞＋形容詞」も一つの呼気段落をなす．英語やドイツ語では1音節前置詞も1音節冠詞もアクセントを持たない．ロシア語では1音節前置詞は後続の名詞とともにアクセント単位をなす．古典ギリシア語では前置詞の語末は名詞などの自立語の語末にあらわれる音素の規則に縛られない（自立語語末に現れ得る子音は s, n, r だけだが，前置詞末にはそれ以外の子音も現れ得る）．アクセントや位置における子音の制約に関しては多くの屈折語では前置詞と接頭辞との区別はつけづらく，例えば事実初期のロシア語印刷物では前置詞も接頭辞同様後続の単語と続け書きされている．

4 梅田博之氏に倣う．形容名詞には一部変則的なものがある．(1)「あんな」，「こんな」,「そんな」,「どんな」は連体的に用いられる時は繋辞の「-な」（連体形）を取らず，終止形の場合には必ず繋辞「-だ」を必要とする（すなわち普通の形容名詞「静か」型とは異なり Ø 形がない）．また副詞形「どんな・に」はありそうだが，一般に「どれ・ほど」,「どんな / ふう・に」などが使われる．これらは連体詞に近い．(2) 一部の形容名詞（漢字語）は連体形の繋辞「・な」のほかに「・」の」をも持つものがある．例：「直接的・な」，「直接的・の」．この場合の「・の」は繋辞「・だ」の連体形として扱うのか？

5 形容詞の副詞形と形容名詞＋助動詞の副詞形をどう扱うかは文法論上の大きな問題である．形容詞の副詞形（中止形と形が一致する）と形容名詞＋助動詞「だ」の副詞形「に」を「副詞」と認定する可能性も否定し得ない（形容詞に接尾する助動詞「だ」の中止形は「で」である）．

6 日本語の形容詞が古代語において名詞と形態的に同じだったことは実証されており，この点ではツングース諸語，モンゴル諸語，チュルク諸語と軌を一にする．形容動詞の名付けは「…に / あり＞…なり」,「…と / あり＞…たり」に由来するものだが，不適当である．現代朝鮮語は形容詞を一次的には動詞とは区別し得ないが，古代語においてアルタイ的特徴を持っていた痕跡

がある.

7 現在の若者言葉「っぽい」(名詞＋，形容名詞＋，形容詞＋，動詞）も形容詞型だろう.「行く・っぽい」,「行った・っぽい」,「行く・っぽかった」.

8 北朝鮮の命名による．日本のいわゆる「形式名詞」に当たる.「非形式名詞」を「完全名詞」と名付けられる便宜によりこの名付けを採用する.「形容名詞」も完全名詞に属する．上に「助動詞」,「繋辞」と認められたもののうち「・よう」,「・そう」,「・みたい」はいわば付属語としての不完全名詞である.

9 ドイツ語の「分離動詞」にヒントを得る．しかしドイツ語の場合は「接頭辞＋動詞」の間で分離が起こるのだが，さらに接頭辞が自立語のように文末に来たりして，日本語のこの場合とは様相を異にする.

10 「勧誘形」/「推量形」の末尾の「う」は本来語尾（厳密には接尾辞）に由来するものだが，現代語ではそれは前の母音とともに長母音と化しているので，語幹に含めるのが適当だろう.

11 子音語幹動詞は実は次のものも不規則動詞として挙げる必要がある.「行く」: II 音便形「行っ-」;「なさる」: 命令形「なさい」，II3 形「なさい-」（これに類するものとして「くださる」,「おっしゃる」がある).

12 動詞「する」,「なる」に接続する.

13 従来日本語の動詞の形態素の分析にはローマ字論者を始めさまざまな試みがあったが，機械的な分析，例えば -anai, -imasu, -eba の類はことごとく失敗してきた．語基の導入は日本の国文法に倣った前間恭作氏やそれに語基の名称を与えた河野六郎先生の朝鮮語研究に負うものである．日本語も朝鮮語もアルタイ系諸言語の Bindevokal の有無による対立よりもはるかに複雑な構造を持つことになる．ただし日本の国文法でいう子音語幹動詞の語幹と語尾の別は全くナンセンスであり（「書く」のうち「書（か）-」が語幹,「-く」）が語尾!!)，母音語幹動詞（「起きる」,「出る」）及び形容詞（「大きい」）の語幹（「起き-」,「出-」,「大き-」）は，わたくしによれば，語根であり,「-る」,「-い」は，わたくしによれば，語基をなす要素である.

14 この後ろに副助詞「・は」その他が挿入し得る．以下同じ.

15 「・で」は本来格助詞であった可能性があるが，現代語では体系上繋辞「・だ」の変化形としてよいであろう.

16 日本語の分析的な形の全貌は充分に明らかにされておらず，それらを含む文法範疇の研究もなされていない．多くは単なる「表現」として文法から除外されている．大まかに言うと，例えば次のようなものがある．1) 「-て」＋動詞 : -て / いる，-て / ある，-て / しまう，-て / いく，-て / くる，-て / おく，-て / みる，-て / やる，-て / くれる，-て / もらう，等々 ; 2) 連体形＋不完全名詞 / (・だ) : する / はず，する / べき，する / もの，する / つも

り，する / こと（これに隣接するものとして「連体形＋完全名詞（意向，所存)」がある）；3) その他：-なけれ-ば / なら-ない，-て・も / よい，-て・は / なら-ない，-て・は / だめ・だ，する / こと・が / でき-る，する / こと・が / ある，する / こと・に / する，する / こと・に / なる，する・よう・に / する，する・よう・に / なる，形容詞-く / なる，形容詞-く / する，繋辞・に / なる，繋辞・に / する．以上は原則として終止形，連体形，接続形がみなそろっているが，次のものは接続形しかない．4) する・から・とて，する・から・に・は，する / ものの，する・に・も / かかわらず，した / 日（ひ)・に・は（これに隣接するものとして「する / 時（・に)」，「する / 場合（・に)」等々がある)．なお以上は変化詞の終止形，連体形，接続形に該当する分析的な形だが，格助詞に該当する分析的な形がかなりある（以下に（副）は副詞形（連用修飾形)，（形）は形容詞形（連体修飾形))．5) ・に / 際-し-て，・に / 対-し-て，・に（副） / 対-する（形)，・に / 関-し-て，・に（副） / 関-す-る（形)，・に / つい-て（副)，・に / つい-て・の（形)，・に / おいて（副)，・に / おける（形)，・に / 応-じ-て（副)，・の / おかげ・で（副)，・の / せい・で（副)，・の / かわり・に（副)，・で / もっ-て（副)，・を / もっ-て（副)，・を / 通-じ-て（副)，「・を / し-て」．これに隣接するものとして「・を / 最期・に」，「・を / しりめ・に」，「・を / もと・に」等々がある．「分析的な形」は文法化の過程にある単語の結合とも言えるが，分析的な形とそうではない単なる統辞論的な構造とは分離するのが難しい場合もある．

17 南北朝鮮の呼称に倣う．漢語を敢えて「漢字語」と言うのは「漢語」を中国の漢族の言語の名称に限定したいからである．中国は中華民国あるいは中華人民共和国の略語であり，中国乃至はシナには中国語乃至はシナ語が存在しないからである（インドにインド語が存在しないと同様に)．

18 従って，漢字語という語層は漢字音を持つ言語のみが持ち得ることになり，それは日本語のほかには朝鮮語とヴェトナム語が語層として持っている．漢字を用いなくてもこれらの言語には漢字音があるので，依然として漢字語は健在である．琉球語には琉球漢字音とでも言うべきものがなく，日本漢字音による漢字語を琉球語式に変形したに過ぎない．琉球語には日本漢字音が生きているとしか言いようがない．

19 歴史的には「声」の語根は本来 kowa- であるが，それに接尾辞 -i が付いた形 kowai ＞ kowe（こゑ）が語幹として用いられており，合成語の第 1 要素としては語根 kowa-（こわ）が現れたと言うべきかもしれない．例：ふな＋ばし（船橋)，cf. ふね（船)．

20 以下この表記法は A・A・ホロドーヴィチ A.A. Холодович / A. A. Xolodovich

に倣う.

21 「漢字語名詞＋がてら」,「漢字語名詞＋次第」がこれに対応する形のようである,「散歩-がてら」,「納得-次第」. これらは勿論「名詞＋接尾辞」の構造であろうが, 文法的にはそれぞれ動詞「散歩・する」,「納得・する」の接続形としてよいであろう.

22 連体詞はいわば不変化の連体修飾語であり, 不変化の連用修飾語としての副詞と対立する. ロシア語文法では不変化の名詞も名詞に入れられるように, 不変化の形容詞も形容詞に入れられるが, 日本語では連体詞を立てる方がよいと思われる.

23 「単語結合」は日本でしばしば「連語」とも呼ばれるが, その概念があいまいなために, ここではロシアのヴィノグラードフ Виноградов / Vinogradov にならうことにする.「単語結合」に似たものとして英語の collocation がある. 単語の結合に際しては, 例えばロシア語の場合（それ以外の多くの言語でも基本的に同じであるが), 次の構造があり得る.

陳述的結合 a（主語と述語の結合）: 「子供が読む」
等位的結合 b（接続詞による結合）: 「本と雑誌」
従位的結合 c（修飾語と被修飾語の結合）［修飾的結合］:「小さい子供」
d（述語と補語の結合） ［補語的結合］:「本を読む」
e（述語と状況語の結合） ［状況的結合］:「学校で読む」

「(小さい / 子供が)（本と雑誌）を-学校で-読む.」

これはいろいろに拡大することが出来る.「{小さい ＋（少年と少女)} が＋{大きい＋（本と雑誌)} を＋（彼らの＋学校）で＋熱心に＋読む.」

ここで核となるのは「本を読む」であって, 補語も状況語もいわば述語を規定するものである. 従位的結合が単語結合をなすもっとも重要な構造である. 単語結合は品詞の観点から 1) 名詞的単語結合（小さい＋子供), 2) 動詞的単語結合（本を＋読む, 学校で＋読む, 熱心に＋読む), 3) 形容詞的単語結合（とても＋小さい), 4) 副詞的単語結合（とても＋熱心に）に分類される. 本稿で述べる「単語結合」は「名詞的単語結合」であるが, 新聞では a ～ d のパターンを持つ. a. 条約＋成立, b. 政治＋経済, c. 国際＋条約, d. 条約＋審議, e. 十月＋成立. なお日本語の漢字語の単語結合（特殊な名詞的単語結合）と似たものを英語に見ることが出来る. {(The University of Hawaii) + Library}{（ハワイ＝大学）＋図書館}. ただしロシア語 Библиотека Московского университета / Biblioteka Moskovskogo universiteta（モスクワ大学図書館 ＜ 図書館［名格］＝モスクワの［属格］＝大学［属格］）は普通の単語結合と同じである. またモンゴル語もこれと似ている : Монгол улсын Их сургуулийн Номын сан（モンゴル国立大学図書館 ＜ モンゴル＋国の＋大きい＋学校の＋本の＋

蔵)．ただしモンゴル語の場合，下線部が特殊な名詞的単語結合をなす点が異なる．モンゴル語にはこのタイプの結合が多い．漢語：北京大学图书馆（日本語の「東京大学図書館」と構造がまったく同じである)．なお朝鮮語 서울대학도서관 Seoul Daehag Doseoguan（ソウル大学図書館）も日本語とまったく変わるところなし．上述の単語結合のうち，勿論語彙の違いはあるが，漢語では d. だけが日本語と語順が異なる（述語＋補語：审议＋条约)．つまり屈折を失った英語の一種の膠着語化の例である．

24 拙稿「日本語造語要素」のうち「接頭的」を「前置的」に，「接尾的」を「後置的」に全面的に変更されたい．

25 この点は故金芳漢教授による．

【参考文献】

菅野裕臣，「日本語造語要素」，『韓国語学年報』（神田外語大学)，第 10 号，2014 年 4 月，117-272 ページ．

菅野裕臣，「朝鮮語の分析的な形について」，『アルタイ語研究』（大東文化大学)，1，2006 年 3 月，109-124 ページ．

菅野裕臣，「朝鮮語の格」，『韓国語学年報』（神田外語大学)，第 3 号，2007 年 3 月，125-137 ページ．